

CHAIN

No.15



An Organ of Fib. Chem. Dept. Feb '63

惜 学

春秋の往来は漸尔して隙なく
人は錯雜尔して到るを知らず

山間の大樹は伐採を好み 湖沼の稚魚は苔帯を好まず
何ぞ学徒の去るを惜しむべき

学は無限尔して大成なく 千変して一道なし
後輩の一途尔至る所を嘲わず
先輩の遅々として選ぶ所を怒る勿れ

唯知る

無為尔して学を惜しみ
嘲弄して師を惜しみ
喧噪して友を惜しむ を

原 隼

目次



目 次

京の都	4回生	井上 修二	2
1月23日の朝	1回生	泉 由美子	3
卒業といつても	4回生	平間 敏郎	4
下手の横好き	2回生	山下 清吾	5
Suming up	4回生	寺田 英一	7
我国の科学技術はどれ程遅れているか		相宅 省吾	7
追いつめられた四回生の原稿	4回生	広瀬 節子	10
白い道	1回生	タ ン	12
心のやすらぎ	研修生	渡辺 昇三	13
寒いつめたい	4回生	大洞 正樹	14
やさしいあなた			15
手袋・足袋	4回生	平間 敏郎	17
八丈島旅行記	4回生	井上 道明	18
四年間をふりかえつて	4回生	村田 有	19
本校遭難救援活動に参加して	4回生	堀内 勝宏	20
温室	4回生	村田 紀子	22
荒木武義先生のことども		岩崎 眉庵	23
京の四季	4回生	喜多 敏夫	25
1回生コーナー			29
無題	研修生	渡辺 昇三	31
我楽多		町 研 生	32
我々人間は	1回生	秋田 佳宏	36
若いエネルギー	3回生	堀江 広	38
大学生活をふりかえつて	4回生	森山 文雄	39
思想随想幻想	3回生	金田 洋二	40
繊維化学教室の生い立ちの記(後)		松本喜代一	47
卒業生のゆくえ			59



京の都

4回生 井上修次

京は僕の心のふるさとだ、もう4年もふるさとで時を過してしまつた。仁和寺の横に小さな書齋を得て学校に通う様になつてから2年と6ヶ月、学校への道すがら、毎日見るあの端麗な比叡そして東山の大字。

かすみにくすんだ比叡もみだし、春の陽気につられてClassic Carで東山の麓も走つた。又、断水騒ぎの夏には夜を徹して比叡に登り、八瀬から仁和寺まで歩いた事もあつた。 足が扁平になつたと云つては笑いながら。

この狭い盆地の中にも、春夏秋冬、それぞれに色々と思ひ出がある。そして、その思ひ出を育てたあの比叡も、東山の大字も、春、夏、秋、冬、とその姿を変える。

春は、かすみにくすみ、比叡から東山までなんともんびりと、のどかな姿でねころんでいる。

夏は、灼熱の日の光を受けながら、さも涼しげに緑をいただき、東山の大字も緑をうつして美しい。

又秋には、晴れわたつた空の青と、雲の白の中にくつきりとContrast強く、山の美しさをおしげもなく示している。そして東山の大字は緑からやがて赤土の色をおびた褐色となる。

そして冬は、寒い冬も、比叡のお山は身ぶるいもせず、ふところに雪をいただき、雪の白さと、樹々の黒緑の対照がなお一層冷たさを感じさせる、又東山の大字には雪がおいて白い大字がふつくらとかび上る。

このすばらしい景色をみるたびにああいい街だなあと、いつも感じるのである。

そして今年の冬はなお一層きびしく寒い、門出のきびしさだろうか。別れのきびしさだろうか。

窓ヲ開ケルト雪ノ照り返リガマブシク目ヲ射タ、イツノ間に降ツタノダロウ、アタリ一面銀世界デアル、日光ハ容赦ナク銀面ヲ照ラス、ナオ一層ハシヤイダ様ニ、快晴ダ、カラリト晴レワタリスガスガシイ、ハダシデ雪ノ上ヲ走り出シタイ程ダ。

粉雪

コク、コク、コク

表ヲ歩ク雪ノ音

窓ニ映エ入ル雪ノ色

空ハ青空、快晴ダ

粉雪

コク、コク、コク

時々スベル雪ノ上

ウツムキカゲンニ雪ヲ見ル

トケテ シタル雪ノ音

粉雪

コク、コク、コク

白クイテツク夜ノ雪

小屋ヨリ吠エル犬ノ声

空ハ星空 冬ノ星

1月23日の朝

1回生 泉 由美子

今朝は珍らしく雪が1cmくらい積つて(積つたと云えるものなら)庭が真白になつていました。「寒いなあ」といやになるよりも、雪が降つて、それがとけてしまわずに残つていることの珍らしさで、とてもうれしくなつてきました。今日は何か良い事があるかもしれないという気がする程でした。朝食を大急ぎですまし、防寒体勢(?)を整えて、自転車を引つぱつて外に出てみると、牛乳配達の人や、新聞配達の人のつけたらしい自転車の車輪の跡が数本、雪の道の上についていました。時刻は6時半頃でしたので、うす暗くあちこちの外燈が明々となつており、近所の家にはまだ明りがついていませんでした。空からは雪ともあられともわからないものがサラサラと降つており、まるで広重の蒲原(東海道五十三次)の絵の中にいるような感じでした。その中を自転車でつつきつて行くのは、寒く冷いけれども、とても気持ちよいものです。何か心の中が洗われるというか澄みきつていくというか、そんな気持ちでした。

阪神国道に出ると暗くて、白かネズミ色かわからないような雪の降つている中を、真白の道の上をヘッド・ライトを照らして、トラックやタクシーなどが通つていくのが、よくテレビに出てくる冬の夜景のようでした。

そして駅に着いて電車に乗り、大阪駅に近付くにつれ、段々明るくなつてくると、絵のような雪景の魅力が薄れてきて、現実の世界に立ち帰つたような気がしてつまらなりました。

桂川を渡ると、雪が少し深くなり、4~5cm積もっているようで、京都と甲子園との差が出ているように思いました。

8時30分に学校につくと、雪の積つたロータリーは、まだ人の足跡も少く、足跡のないところを通つて、自分の足跡をつけるのが、とてもいい気持でした。きれいな雪を一つかみ手に握つてみると、いつもの雪と違つて、粉を握つたような感じで、手を開いてフツと吹いてみると、サラサラと掌から散つてしまいました。これが紛雪というものだろうなあと思ひました。この時、高校の国語の先生が「紛雪というのは手に握つてもしつかりと固まらずに、又もとのようにサラサラとした雪になつてしまうものだ」とおつしやつていたのを急に思い出して、高校がなつかしくなつてきました。そして今度の試験が済んだら一度高校に行つてみようという気になりました。

チェーン編集の人に頼まれて、唯なんとなく、今朝の事を願を追つて書いたにすぎませんので、盛り上りのないつまらぬものになつてしまいました。このところ、唯試験の前の憂鬱な気持に支配されていますので、こんなものしか書けませんでした。おわび致します。

卒業といつても

4回生 平 間 敏 郎

4年も終りになると、学校から厄介者あつかいの態度が露骨になつてくる。後50日にも満たない日々を考えると、後悔と感傷が期待を喰いつぶし、北風と一緒に増して寒々とした思いにさせる毎日である。大学に入つて特別の思い出もなく平々凡々の日々を送つてきた。大学に入つた時のあの意気は今ももうなくなつてしまつた。このように無気力になるのは何も自分一人だけの責任だけでもなさそうだ。社会一般の風潮がそうなつている事も大きな原因だと思ふ。つまり、大学生が学割をふんだんに使つて色々和社会人のしない事までに出す結果、大学とは授業料を払つて遊ばしておく所ということになる。学生の間でも勉強する奴を融通の効かない無能者同然のあつかいをする傾向にある。おべつかいや、遊びのお相手で一生過せそうにも無いので卒業前になつて、これでは困ると非鳴

を上げている輩は多くいる。私自身その最たる者である。

雑学を頭の上に乗せ、大学出で御座居と、高い給料を貰い、苦勞し実力を附けた人を足場に地位を得、大学とは有難い所だと言ひ切れる人が将来何人いるだろうか。

難しいものを避け、取り易い単位だけ手に入れ、実験を人にたのみ、たのまれた者が次の人に頼む。演習をすれば、答案丸写し、これぞ正しく学問の自由とは至言である。この中で自分も大きな力として加わっていた事を誇ることが出来ようか。

「もう二年も有れば」とは引かれ者の小唄だ。

ともかく、卒業は寂しい。卒業に値せぬがゆえなおさら。

下手の横好き

2回生 山下清吾

中学校に入つて間もない頃でした。体育館の中央でマツトや鉄棒でサーカスのような事をしている人々を見かけました。まるで人間技でないので驚嘆の思いで見とれて居ましたが、俺もあんな事が出来るのかなと思つて聞いてみたら、その人々は体操部とかで一年も練習すれば出来るようになるとの事で、一人前になつた日の結果を考え、自分の運動神経も顧みず入部したのが間違ひでした。今、書いた結果というのは、大車輪とかいうものをきれいな女の子の見ているところでして“あら山下さん、ステキ!!”と言われる事だったので、思えばワタシも早熟でした。入部の動機がかく不純なものだから神様は、同情してくれず以後苦惱の連続。地上転回が、やつと出来たのが入部してから一年目だから他の事は追つて知るべしです。夢にまでみた大車輪は出来るはずがなく、逆車輪のはじめての練習で頭から落下してノビたのが二年目。とうとう退部したのが二年半たつた頃。結果としては神経痛が残りました。と同時に体操が好きだつた事を知りました。

下手の横好きのたぐいにもう一つ音楽があります。小学校四年生になつた時、両親にせがんでヴァイオリンを習わせてもらつたのが、音楽をより身近かに感じはじめた最初でした。始めは無我無中で、前号に松原さんが書かれていたテクニクとか音楽性なんて頭に

全然なく、"うまくなりたいただそれだけでした。先生におこられ、同じ個所を何回も何回もひかさされ、幾度泣いたことでしょう。先生にみてもらう日、自信のある時は学校から帰る足の軽かつた事、またその反対の日は学校から帰るのが恐ろしかつた思い出。この事は忘れられない記憶です。

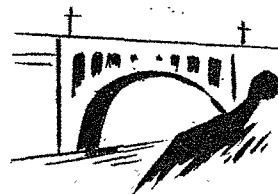
中学に入つてから、いろいろな名曲を知るにつけ、今にきつとひけるようになると練習を続けてきましたが、だんだんけしからん考えが出てきました。チゴイネルワイゼンとかメンデルスゾーンの協奏曲などをひいているのを、ある女の子に聞いてもらいたいという事でした。(念の為に書いときますが、この女の子とは今だに深い交際を続けております。相手の人がどう思っているが知りませんが、自分はそう信じていたいのであります) こんな不純な気持を持つてからはこの面でも神様に見放されたく、この頃、生徒会、新聞部、などにも入つてましたので、ヴァイオリンを持つ時間が少なくなり、遂に高校入試前に練習をやめたのです。夢も消えましたが神様は惜しい事をしました。ここに不滅の天才ヴァイリニスト山下清吾は死んだのです。

高校時代は、音楽が別に嫌いでもなかつたので、うまくもないヴァイオリンを折々気の向いた時にギイギイ鳴らしていましたが、頭脳明晰な方でもなく、高校三転の事情もあり、先生につくところまでいきませんでした。

大学に入つてから、すぐオーケストラ部に入りましたが、再び先生につく決心もつかず、一人ノコギリの目を立てるような音を出して喜こんでいます。周囲の人は恐らく大迷惑なのだろうとは思いますが、何も言わないので聴き惚れているのだと信じている今日この頃です。

ところが今日、再び先生につく決心をしました。と言うのは、我下宿の近所にピアノのうまいうら若き女性が居る事を発見したからです。もう数年たつたら、皇太子のチエロ美智子妃のピアノのような姿がみられるでしょう。

下手の横好きも大したものです。この文章を書きながら考えたのですが、何事をするにしても蔭に女性それもバアサンでない人の応援がなければ成就しないのではないかとネ。



” Summing Up ”

四回生 寺田英一

Chainに投稿するのもこれが最後である。しかし今更先輩面をして後輩諸君に言い残したいことも、忠告したいことも別にない。

優の数も単位の数も適当にとり、その他大学生なら誰にでもやりそうなことは大体やつて来たし、就職も定つている今、あとは卒論を仕上げて卒業を待つだけである。どうやらこの四年間は人並みに過ぎて来たし、満足もしていないが、それ程後悔もしていない。

唯一つだけ残念なことがある。それは大学へ進んだ目的の一つでもあり、又高校以来ずっと考え続けて来た問題……即ち自分の人生にとつて一番大切なものは一体何であるか？を知りたいこと。又それを追求していく為のバツクボーンとなるべき確固たる信念を獲得したいこと……が今日も未だ解決されないことである。この抽象的な莫然とした命題の解決にはあと何年、いや何十年かゝるかも知れないが、大学という温室から、きびしいがしかしやるべきことの多くある実社会に出てからも絶えず追求していくつもりである。これが小生の四年間の総まとめSumming upである。

我国の科学技術はどれ程後れているのか？

◆
相宅省吾

近年、技術革新、技術導入等で日本の科学技術は随分後れを取り戻し、諸外国に追いついて来たと云われ、事実テレビや各種の新しい繊維等が市場にあふれ、更に鉄鋼の生産では英国を抜く様な有様となつてきた、この様な外見だけを見れば、我国はすでに西欧諸国に追いついたと云う事は一面の事実を示しているが果してそうであろうか。特に近頃人づくり

官民一体として呼ばれ更に人づくりと科学技術を職業としている我々にとつてもう少し、この問題を考えて見たいと思う。

今比所で(科学)技術と云うのを簡単に考えている様であるが、之には質的に異なつた色々な段階がある事を気付くのである。夫を今仮にA,B,C,D,E,Fの六級に分けて考えて見る。只之がどれが上級でありどれが下級であると云うのではない。

今A級の技術者、例えばエヂソンとか、ナイロンを始めて発明し工業化した米国、デュポン社のカロッサとか、原子力を開放したイタリーのフェルミの如く無から有を造り上げ製品化した人達である。

更にB級とは現在ある物質、例えばソニーの技術者のように外国のトランジスターを改良してラジオやテレビを造り上げた、又前から存在するグルタミン酸ソーダより味の素を造り上げた池田博士の如く、存在する物質の新しい性質を発見し工業化した技術屋を指してよいと思う。

次にC級の技術者と云うのは、国の内外に確立した、又確立しかけた技術をより早くキャッチして技術導入し取り入れ、この工業化に成功した技術屋を指す。之は例えば、ポリエチレンやテロン工業とか、鉄鋼の技術とか、蛍光灯に至るまで夫々導入して成功した人達である。比所には例えば、東レ、帝人の経営者等が上げられる。

D級の技術者とは以上の導入された技術を単に現実に設計し計画し実施に移す人達である。この人達としては各会社の職員達であろう。

E級の技術者は設計計画されたものを実際に旋盤でけずり釜をたきメーターを調べ所謂現場技術者と云う人達である。

F級の技術者、例えば直接製品を作り検査する人達を指す。

今我国では残念ながらA級の技術者は見えない。この様な独創性のある発明が無かつた訳ではない。(勿論少ないが)しかしそれを育てる社会、人、即ち環境が悪いのではないかと考えられる。即ちA級の科学技術はどれだけ後れているのか最早時間では計算できない。一応100年の後れがあると考えられよう。

B級の技術者はどうだろうか。之に相当する人は時に見受けられる。そして現在我国ではこれを日本独自の技術と称している昔からすでに存在しているものから全く新しい長所を見出す事は重要な事であるが、矢張り完全に独創性を誇るにはいささか淋しい気がする。猶不思議な事にはこの様な技術者には本田技研の本田社長の如く学歴は大して問題ない様な気もする。B級では外国に比して10年後れていると考える。

C級の技術者は之は仲々に多い。明治以来我国は西洋の文物を速かに輸入して早く外観だけでも外国並の近代国家となる様に官民一致して努力した成果により、白人以外で唯一の工業国となり得たのもこの為である。この様な技術者の中には一流大学の所謂秀才が多い。しかし如何に速かに外国のものを取り入れても真似は真似であつて外国より進む事は出来ない。即ち1~2年の後にはやむを得ない事である。

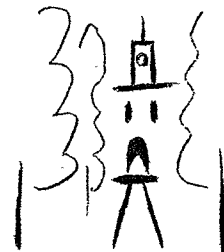
しかしD級の技術者になれば如何であろうか。外国から未完成のものが輸入され我国の現場技術者の手により非常に優れた製品を外国より早く出す事がしばしばある。これは現場技術者の誠実なる努力と頭の良さと器用さのたまものである。このD級においては私は外国の技術より1~2年進んでいるのではないかと見る。

更にE級はどの様な人達であろうか。昨年スペインで技術者コンクールで金メダルを獲得した所謂熟練工の人達、粗末な機械で見事な製品をつくり上げる中小企業の技術者達であろう。この人達は外国に比して10年も進んでいるのではないかと考えられる。

更にF級とはどの様な人達だろうか。我国が農業国より工業国になる時最も働いた人達、蚕のまゆより絹を取り素晴らしい織物を作り上げる小女達の技術、又目に見えないトランジスターの心臓部のハンダ附をする技術とかカメラのレンズを磨き上げて行く技術など、これは生得のものであつて外国より100年も進んでいると考えて良い。

我国は今までこのD、E、Fの技術者に頼つて近代国家に脱皮してきた。そしてC級の技術も異常な努力により外国に近づいてきた。しかしA級、特にB級の技術も稀ではあるが出て来た。問題はA級の技術がどの様にすれば生れるかである。真に獨創性のある科学、技術は我国では生れないのだろうか。私にはよく解らない。只云える事は、A級の技術が生れて来て始めて我国が西洋に追い付いたと云えるのではないか。

私は今技術者として、又人造りの一員としてこれから生きて行かねばならない。理想は高い方がよい。どの様にすればA級の科学技術が我国に生れるだろうかを考えて行きたい。そして一日も早く西洋に追い付いて名実ともに近代国家として一人立ちするようになりたいと思う。



追いつめられた四回生の原稿

4回生 広瀬節子

“工織に入ってからもう4年……”これは去年のC科追い出しコンパの席で4回生の人が歌っていたものです。あの時は笑って聞いていましたが今は私が4回生で追い出されようとしているのです。確かに私が工織に入ってからもう4年なのです。先日chainの編集部の人が実験室に来て、どうしてもchainに何か書けというのです。4年間に感じた事、思った事、何でもいいつて言うんです。期限は1月31日、そして今は1月30日の夜10時50分です。追いつめられたものです。

さて4年間に何をしたかなと考えるとこの4年間で私にとって意味のあることは一人旅をするようになったということだと思いついたのです。高校時代までも旅行や山や海に出掛けて行くのは好きでしたが、いつも大勢の友達と一緒にないとつまらないと思っていました。それに元気そうな事を口では言っても大変な淋しがりやで一人でどこかへ行くなんて事は夢にも考えられませんでした。それが大学生活も半分を過ぎた頃から一人で旅に出てみたいとたまになつたのです。普段の生活から離れて自分を見つめてみたいとなつたのです。そして3回生の秋にやつとそのチャンスが訪れてきたのです。

一人で秋の山路を歩いているとその自然にとけこんだ自分とそれを客観的に眺めているもう一人の自分がいるのです。それに普段の自分を振りかえつてみても別の自分というのがいて喜んだり怒ったりしているのです。別の世界から自分を見ているようで楽しくなつてしまいました。

それから一人で旅をするとその土地が持つ独特の雰囲気は十分に味わえると思うのです。何人かの友達と行くとその友達と一緒にというので自分達だけで一つの雰囲気をつくつてしまつてその土地そのものの持つ雰囲気にはとけこんでいけないんです。それに人の親切というか善意というものに出つくわしやすく又それがしみじみと感じられますし訪ねた地の人々ともこだわりなく話が出来て楽しいものです。

去年の夏、山からの帰りに一人で永平寺を訪ねたときも一人だつたからこそ、あの寺の持つ威厳というか壮厳さというものが強く私をとらえたのだと思うのです。六百年は経たという大杉の下に立つて肌寒い位の早朝の空気を胸一杯吸いこんだ時、せめてもう百年前

に私が男子として生きていたら……きつと家出して人里はなれきびしい修業のこの寺で一生を送つたであろうと考えました。何かを真剣に考えつめるということも一人で旅に出た場合でないとなかなか出来ないものではないでしょうか。

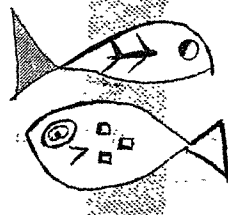
それからもう一つ、一人旅で得るものがあるのです。私達の周囲には何か面白い事や対人関係のうるささというようなものが必ずあると思うのですが、一人旅から帰つてくるとそういうものが何でもなくなるのです。今までうるさいとか嫌だとか思っていたものにも面白さを感じるようになるものです。

地図や時間表をひろげて自分の好きなようにスケジュールを組めるのも一人旅の良さです。計画変更でもめる相手もありません。

でもこんなにのん気で勝手に旅が出来たのも大学生活があつたからこそだと思つたのです。これからはちよつとこんなわけにはいかないでしょう。こんな事を書くとき“大学は旅行するために来る場所ではない。”つて叱られそうですが、私には一人で旅をすること、それの持つ意義がわかつたというのは一つの大きな収穫だつたのです。

4年間に得た収穫つてそんなつまらないことかつて笑われる方もいらつしやるでしょう。でも何もなかつたよりはましだつて言つておきましょう。それからもう一つ都合の良い(?) 言い訳は“追いつめられて書いたのでもつと重大なことは頭に浮んで来なかつた”つて事なんです。追いつめられているのは chain の原稿ばかりではありません。卒論要旨集の原稿もなのです。

では3回生以下の皆さん、残りの学生生活から貴方(貴女も)にとつて何か意義あるものを見つけて下さい。(陳腐な言葉で申訳ありません。)



白　い　道

1回生　　タ　　ン

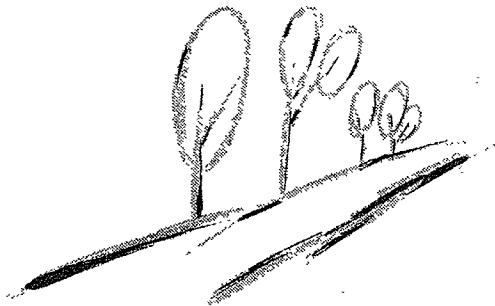
暗闇の内より　　溢れ出る
どくどくとした　赤熱の
苦痛に犯された肺

君去りし時
我が全身に　　漲ぎる
敗北の色

君奏でし　　音曲の
神秘のヴェールに　包まれた
我が汚身

「晴子」
答えるものは　　涙なりとも
君は居る
あの山の雪の下
嬰兒の吐息の中に

………　だが
私は敗けない
再会の喜びを
この世の苦痛の　代償に
私は行く
どこまでも続いた白い道
凍りついた　　この道を



楓橋夜泊

月落烏啼霜滿天
江村漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

心のやすらぎ

研修生 渡 辺 昇 三

張繼は中唐の人、生歿は不詳だが756年に在世の記事がある。

この詩は古来有名な詩で旅吟としても抜群の作であるといわれる。

題字の楓橋は姑蘇城即ち古の呉の都今の蘇州の西で十中国里、運河上の石橋で、当時揚子江の南北の交通には必ず通過するところであつた。寒山寺はそこから約三寸の処にあると伝えられる。

張繼も又旅してここに舟泊して寒山寺の鐘の音を聞いてこの詩を作つたとなにかに書いていたが私もそうであると思う。

現代の僕にも条件は異なれど、よくこの様な心境になる。

現代の暗下は三面記事の暴力の世界、中は交通地ごく、上は宇宙時代という現代において心のやすらぎというものがなければ人間という動物は面しろく暮せないのである。

この詩は秋の旅の夜泊は淋しく、眠られぬものであるということを歌つているのであるが、詩一つについて味わうということはやはり心のやすらぎを起すものではないでしょうか、僕はこの詩が好きですのでこの詩において心のやすらぎを人間は求めて生活をしなければ面白く活せないという僕の信条をのべたまでです。

寒い・つめたい

4回生 大洞正樹

寒波襲来で北陸地方に大雪が降り被害が相当出たそうですね。年に2,3回しか雪が降らない京都では想像も出来ません。京都もその影響をうけてか冷え込みが厳しく、フトンの中に入つて手を少しでも出してつまらん週刊紙を読んでも数分のうちにつめたいというよりは痛いといつた感じがいたします。水道管のはれつのため水が出ず、コップ一杯のもらい水を手ぬぐいにしめらせてサツサツと顔をふいてから学校に行つてみるとめにはからんや中庭の池には2cm近くの氷がはりつめてちよつとやそつとでは割れません。まず小石でたたいてみてみたがヒビ一つ入らず、次に少し大きめの石でやつとヒビが入りました。最後に片足を上げ注意深く氷の上に重心を乗せないようにコツコツとやつて氷を割つて意気ようようとして生協に朝食のパンとミルクを取りに行き実験室の石油カンの穴をあけたやつをリングバーナの上にかぶせたストーブにかじりついて朝食をとりました。30分か1時間すると昼めしの時間、悪友と一緒に食べに行く途中もう一度池の様子みたところ朝見た時と少しも変わりません。そこでいいました、「氷の上のつても大丈夫や」するとそのうちの1人が僕がやつたのと同じよう氷の上を靴でゴツンゴツンとやつたそうです。その時候は見ていなかつたのでわかりませんが、ひよいと横をみると、ものの美事をスタイルで池の中に落込む瞬間でした、今でもその動きがスローモーションのカメラの如く思い出されます。さいわいにして野次馬もなく又ケガもなく、彼自慢の腕時計も水にはぬれなかつたようです。ただ全身びしょぬれ寒い寒いといつていました。

寒いのはあたりまえです。今は冬です。しかも寒波襲来で零下数度という時ですからね、ここに寒波のための被害者の一人について述べましたが、そういう僕も被害者の一人です。なぜならそれから一週間顔も手もまともに洗えなかつたからです。

A君ここに君のことを書きましたが悪義があつて書いたものではありません。京都の冷込みがきついということを書いたかつたからです。もつともCHAINの編集委員が毎日何か書けとおどかさされ、それを安請合いた運のつき題材に困つてこんなことを書いてしまつたのです。おゆるし下さい。



やさしいあなた

あの雪の街路樹を、私は全くこの世の中に一人きりでした。

人つと一人として見当らないのが本当に堪え難い気持でした。

見上げると雪の花びらは水銀燈の光に映えてこの世の物とは思われませんでしたの。まるで私の身体は宙に浮かんで進んで行くようで、白い影は私を通り過ぎて行くのでした。

あなたがお苦しみになることなど、本当にいけない私でした。

やさしいあなた。頼もしく、誠実で、思慮深くそして寛容であるあなたのことを思うと私は本当に幸福でした。

しかもあなたは真実を求めてお進みになるということをお聞きしてからは、私は少し恐ろしかつた位でしたの。

何が真実であるか私にはよくはわかりませんが本当に求めるに充分価するものだと思います。

あなたはいつかおつしやいました。「あなたの方がより真実であるような気がしてたまらない。」

今となつては、妙につめたい空にカランコロンとまるでスフィンクスの喉よりも濁いた響きを残して消えていくのです。

あの時から私は……、ぬぐいきることのできない、そして絶えず私をすつぽり包んでしまふ不吉な暗闇はどこまで私を追つて来るのでしょうか。内心から欲するがまゝに生きるということはどうしてこんなにもむづかしいことなのでしょう。

私としても断絶することのできぬ人間のきずなだけに自分をみつめることが出来るのです。憎悪とか偏見とかいうものは果して天賦のものでありましようか。

そんなことはあり得るはずがありません。

人間は誰でも、物心つかぬ頃から教え込まれるのです。

一生懸命……、骨の髄まで浸み込むように、たゞき込まれるのです。

「これはだめ」、「あれは恐ろしいのよ」、「あの人は悪い人なのですよ」

私のために苦しむなんてそんなことはどうかなさらないで、
やさしいあなた。思慮深く、慎重で、いかなる時にも冷静なあなたが、苦悩に悶える姿な
んて、私には想像するだけでも堪えられません。

「結局人間はお互い一人ぼつちなのだ」つぶやいたあなた。私は本当に淋しい気が致しま
した。心の底から湧き出る淋しさなのです。

いゝえ、私のことは大丈夫です。どうぞ御心配なさらないで下さい。

私自身、幼い頃から締らめという観念を自然とうえつけられたような気が致します。もつ
と強くならなければならぬ、憶病な私。

苦悩に堪えていくこと。これだけが私のとりえなのですもの。

.....

喫茶店の片隅でいたずらを発見された子供のようにてれるあなたのお願だけが妙に私の頭
に焼きついているのです。

今となつては、はるか昔のことのような気がしてなりません。

その通りなのです。男として生まれた以上、どのような階級にあるかと、汗を流して働く
ということは一番ふさわしい事ですし、それが又人生における意味であり又目的でもあり
ます。それによつて幸福とか満足というものが得られるに違いありません。

やさしいあなた。primitiveなはだかの自分をみつけることは大切なことです。そし
て内心より欲すること以外のことはなさらないで下さるよう。

私も心からあなたのことをお祈り致します。

朝、目が覚めて、まだ生きていた自分が意外であるような気が致しました。明るい冬の陽
光を浴びながら涙がほとばしり出しました。

何が何でも神様に感謝したいようなこの気持なのです。「私の神様」とつぶやいてみて一
人で微笑しました。

起き上つて、今、ひそんでいた物が急に溶け出したように思われました。自分の生きる道
が現われて来たようです。自分にはそれがまだぼんやりとしかわかりませんが、妙にそれ
ははつきりしたもののなのです。

近い内に一度帰省致したいと思います。

あなたの御健康を祈りつゝ

心の底より

手袋，足ぶくろ

4回生 平間敏郎

手にあるから手袋，足に褌があるのに靴下，あたりまえの話だ。では足の所へ手があつて，手の所へ足があつたら何というか，誰もわからない，そんな事が起るはずがないからだ。これは不合理な事だが，それが起つたとすると世の中の困難がすべて解決するのではないか，夢みたいな話だ。

足袋（ぶくろ）は「あしからず」とばかりにタバコを弊にはさんで鼻から煙を出させる。こにくらしいしぐさだ。足の手は，靴があるかぎり必要だ。おかげで長い間タンスの隅で待ち疲れたつぎはぎだらけの手袋の新しい使い道が出て来た。そのかわり手の足劣（ぶくろ）は，穴が開いたからとか，片方の色が太陽にあてると少し異うからとか言つて，次々と変えられる。

つまり両方とも虚栄心そのものと言える。

外を歩く時ならいざしらず，電車に乗る時など，切符を出す為片方の手袋をはずすが，つけるのが面倒なのでやらないままにしておくと，そのまま一日しないている。別に気にもならない。当然といえば，又当然の話だ。そうだからと言つて，片方しか持たず外にも出られない。何んという不合理な事だ。俺は大いに怒つた。そこで先に片方だけ手劣をして散歩に出掛た。自分さえ気にしなければ何んでもない，右手は皮膚の年輪一つ一つから自然のめぐみを吸い感じとる。吸い過ぎると，気安くポケットに入れる。口笛が自然と口先で踊る。ああ快いかな。片方の手劣よ。いい気持で足を伸ばし近くの市場にまでやつて来た。人が居る。ぞろぞろいる。誰も片方の手袋に気が付かない。ざまあ見ろ。いい気持だ。優越感中の優越感とはこのことだ。試験のやまが当つた時のあの感じだ。残念，片方の手袋を知つてる者に出くわした。有頂天から正に現実のあの劣等感へ引き戻された。お袋だ，頭腐と野菜を両手に持たされた。成程世の中には無駄の様に見えて無駄はない。妙な所で感心した。何を考えているのかわからなくなつた。頭の中が寒さでやられた大根の様にさくさくと音をたてた。

八丈島旅行記

井上道明

この4年間各地を旅行し、夫々の土地で楽しい思い出、へまをやつたことなど色々あるが、最も印象に残っているのは八丈島への旅であつた。八丈島は伊豆七島国立公園の最南端の島で東京から約400 Kmの距離にある。

この島へ行つたのは春も三月初めの頃であつた。東京から黒潮丸という500トン位の貨客船に乗込んで約半日、夕方に東京のネオンまたたく港を後にして、翌日の朝に八丈島に着いた。この島は鳥も通わぬ八丈島と云われているように、八丈航路には黒潮丸が一隻就航しているだけであり、海が荒れたりすれば出航は予定よりも1日や2日必ず遅れるということであつた。そしてこの航路は荒れることで定評があるそうだが、我々の精進が良かったせいか大したことはなかつた、といつても船の進行方向に寝ころんでいてもローリングのために左右にころげる始末である。やつとの思いで鳥も通わぬ八丈についた。この島には港がない。だから乗下船の時はハシケを利用する。方法ときたらむしろ人というより貨物並の扱いで、大きなうねりでハシケが浮上る所を見計らつて船員が我々をハシケに投げ出してくれるので、我々は唯両手をつかまれて、はいと投げしてくれるのを待つだけだつた。

この島は二つの火山から出来ていて、その火山の中間の平野部に部落が集まつている。島をとりまく道路は、立派な舗装道路でやはり東京都下という感じがした。黒潮に洗われているだけにさすがに暖い。3月始めて桜が満開だつた。さぞかし夏は暑いであろうと思つたが、島の人のお話では空気が乾燥していてそれほどでもないらしい。島内至る所に亜熱帯植物が見られ、観葉植物等が栽培され、我々の目を楽しませてくれる。これは内地に出荷されるそうである。島にいたのはわずかる日ばかりであつたが島の人々に接することより色々な知識が得られた。こういう島の例外にもれず若い人達はほとんど島外に出るらしい。八丈島は伊豆七島で唯一水田耕作の出来る島であり、島の職業も農業が多いということである。我々のお世話になつた家は魚屋の店を出していた。その御主人は戦争中に関西に住んでいたという人で昔話に花が咲き、我々の関西弁がなつかしかつたそうである。

この八丈島は今では観光地になろうとしている。日何往復もの飛行機が島と東京を往来している。もう何年かすれば、俗っぽい観光地になつてしまふかも知れない。今のまま

の姿で残してほしいと思うが、そうもいかないであろう。色々書いたが、やはりこういう島は我々にとって捨て難い所がある。

もし行こうという人があるなら、夏に行くことをおすすめる。夏は海はそんなに荒れず、又南国の気分を充分満喫出来ると思う。

四年間をふりかえつて

4回生 村田 有

四年間をふりかえつて見て、今迄に何をやつたかと考えて見ると、はずかしい事ながら、何もやつていないというのがほんとうのようだ。時間的、経済的、その他いろいろな事情で出来なかつた事もあるだろうが、やれなかつたというより自分がやらなかつたのだ。いざやるとなると事なかれ主義で過してしまふ。悪いとは思つてもどうも直す事が出来なかつた。“何でも見てやろう”という本の中で著者は云つていたと思うが、“まあ何とかなるだろう”という気持は悪く言えば乞食と同様の気持だとか？時間的にルーズで無計画な自分の事だ。色々の事でさしさわりが出てくるのも当然だ。それをいい事にやらなかつたという感が強い。

何をやるにも思いきつて自分のやりたいことをやる。それが失敗しても後で後悔はすまい。これが入学した時の気持であつた。が反面何とかなるだろうとして楽天的にすまそうという気持も多分にあつた。自分の好きな野球も思い切つてやつていない。旅行、碁、マージャン、考えて見ると遊ぶ事ばかりだがこれさえ出来ない。まして嫌な勉強、実験等やれるはずがない。だから卒業前というのに卒論も出来ていないのだ。しかし後悔してゐるのではない。自分なりにのんきに、且つ楽しく過したのだから。

実験室でのアマダ、又飯を食いながら和気あいあいと過した事など、学生ならではの事だろう。どちらかといえば家庭的な雰囲気のあるこの学校。何をやるにもやりがいのある学校だ。クラブ活動一つにしても、他の選手が巧いといつても知れたもの、やる気になればすぐ中心選手にもなれるのがこの学校。それに比べ人並の才能、努力ではついていけない。人一倍の根性と素質が必要とするような学校もあるだろう。こういう学校では自分のやりたい事も充分できないだろう。そういつても学校には夫々の良い面、悪い面があるの

だから、どこが悪いというのではない。人夫々に適した学校があるのだから、この意味で
ばくが偶然この学校に入つたのは幸運だつた。この学校にも欠点は多い。どうも小さなわ
くに閉じこもりがちのようだ。小人数の学生の事だから当然対人関係も少ない。学校とは何
れも学問的な事だけに終始するのではないのだから出来るだけ多くの人と接する機会を持
つのが望ましい。それ故出来るだけ多くの人が何かのクラブに入り、活動するということ
は他に少々の害があつても大切なことだろう。それにしても工芸学部と繊維学部が離れて
いるのは全く不便な事だ。全く別の学校のような感じがしないでもない。関係するのはご
くわずかでクラブ活動にも大きな支障がある。片道へたをすると一時間ほどかゝる。こん
な事では合同で練習も出来ないのは当然の事だろう。繊維化学科に関する事でも多くの問
題もあるだろう。現在ある講座はどこへ行つても同じようなもので、もつと独特な講座が
あつてもいいはずだ。器械類、器具類も少ない。これらは小さな大学の悲劇か。知識欲に
燃えた人なら失望するのも当然だろう。

以上雑然と書いて何を云つているかわからないが、わかつてもらえる点もあるだろう。

本校遭難救援活動に参加して

4回生 堀内勝宏

正月三日僕が山より帰つて新聞を見ると、北学大の生徒が旭岳で遭難したとのニュース
が載つている。今年も遭難ブームだなあと思つていると四日午後二時のテレビニュースで
本校山岳部の一行が中央アルプス空木岳附近で遭難したとのニュースが出た。まさかと思
い本部に連絡した所真実だつた。すぐ京都に来た。その時はまだ僕が救助隊に加わると
は信じていなかったが、もし役に立つ事が出来るなら加わろうとも思つていた。夜に第
一次救援隊が現地へ出発した。救援隊といえども部長の荒井先生他現役一名、O・B 2 名
だつた。これ等の人の他当時神城にてスキーをしていた部員が加わるとの事だつた。多
分これ等の人々の他に現地人が加わり救助活動に入る事だろうと僕は軽く思つていた。
しかし後になり僕が現地に行つた時(6日)まで現地人は入つていなかった。僕みたいな
第三者がとやかく言う事はないがどうしてニュースが伝たつた四日に、遅くとも五日に
現地人を入れなかつたか疑問に思つてならない。又四日の夜僕等ワンゲル部員は守衛室の
電話をかり、一夜中本部(当時工軽学部にあつた)にその後のニュースを知る為何回とな

く電話をかけたのであるが、対策本部に泊つていられた人は、工芸学部の山田先生のみだつた。一体対策本部がこの様な事でよいのであろうかと不思議に思わざるを得なかつた。翌日早朝救援隊第2陣が京都を出た。しかしどうみても救援隊の絶対数がたらない。それで現地での荷物ボツカ、伊那川、倉本間の連絡員としてワンゲル部員が援助する事になつた。その一陣として僕が五日の夜京都を出たのだ。現地についた時、雪はしんしんと降り空は僕等の心の様に暗らかつた。それでも倉本の駅で昨日（五日）下山した奈良山岳会の人々が稜線近くのテントにいる事を見とどけたというニュースを知らせてくれた故、僕ももう大丈夫と安心する所大であつた。六日現在現地で活躍する人員は荒井先生を筆頭に現役部員及びO・Bで20名程度、それにスキーより加わつた一般学生少々であつた。まだ捜索は開始された直後だつた。その夜（6日）10名の現地人が捜索隊に次の日に5名の大商大山岳部員が加わつた。7日に現地山岳会の人々が負傷した新美君のいるベースキャンプ捜索に行なつたが見当らなかつた。一方稜線にいる北野、杉原君の救助も二人が生存している事が確認されてからは一層ファイトを出して行なわれ、倉本とは反対側の駒ヶ根側より駒ヶ根山岳会のメンバーが6日に上山して下ださつた。我々の予想では8日午前中に両方より全員無事というニュースを開けるものと十中八、九思つていた。この間ボツカ隊も救助隊前進基地より要求してくる物資を運んだ。この救助活動中スキーを中止して現地に来た一般学生の活動は目ざましいものがあつた。そして待ちに待つた8日が来たのだが、そのニュースは明暗をくつきりわけた。僕等はこの様な事を予想したろうか。新美君等の救助は当然であつたとしても、北野、杉原君も当然救われたものと確信していたからだ。北野君等がテントに不在のニュースを耳にした時、誰かのすすりなく声が聞こえた様だつた。僕も自然と目がうるんできた。誰かが言つた、“北野、杉原の両君は「山の鉄則」を破つてテントを出たのは遺憾だ”と。本当にそうかもしれない、あの狭いテントで50mの風が吹く稜線8日間も我慢したのだ。あと一日我慢すれば助かつたのだ。救援隊の誰もが惑ずる所だろう。しかしここで考えられる事は逆にもう一日早く何とかして早く稜線へ救助隊を送れなかつたかと言ひ事だ。何といつても惜まれるのは救助活動という大バクチをするに当り、現地の山岳会という切り札を早く使わなかつたか。ヘリコプターを飛ばすといつて飛ばさなかつたか、僕等が疑問に思ふ所が多くある。僕が想像するには我々が救助活動を行なつている事を知らず（彼等はラジオを持つていたが、三日までしか電池がなかつた故、捜索活動についてのニュースを知らない）約7日間あの狭いサブマリン型テントで頑張つたが（彼等は12月30日より1月5日までテントにいたと思われる）ついで自力で空木の小屋に向つて歩み始め、その途中で風の為伊那側に滑落したのでないかと思ひ。結局両君は現在までの所純潔な雪のフロンをかぶせられ永眠した事が決定的になつた。他方新美君の方は8日無事スノーボードで倉本に降されたが、骨折や刺傷で皆さん御存知の様に目下中央病院に入院している。

捜索活動は8日以後、北野、杉原両君一本にしほられ多方面に渡り行なわれた。稜線より

持ち帰った遺留品中に有名になつた杉原君の手記もあつたのだ。あの手記の件でも新聞に載せる必要は全くないものだ。載せればその反響が大きくなる事がわかっている文書だつた。都合の悪い所をカットした所まで考える所があつたのならなぜ新聞に発表しなければならなかつたか。筆者の杉原君にしてもただ肉親当に書いた記事が世間の人々への記事にとられた事をおこつている事だろう。でも彼も北野君も良く7日間も零下数十度吹雪の中でよく頑張つたものだ。多分テント脱出した時は正気ではなかつたらう。本当に7日間もよくやつた。この様な事を書いても同じ山へ登る仲間として僕は決して彼等が山で死んだ事を美しいとも思つていないし、英雄視しようとも思つていない。彼等が遭遇した多くの不運が彼等を死に導びいたのだし、又彼等の技術不足が又、山岳部全体としての技術不足、装備の不足が彼等を死に追いやつたのだ。山岳部が反省しなければならない事は反省するだろう。しかし僕等一般学生も反省しなければならない事もあろう。彼等の不幸を無にする事をしに山岳部の再建の為、僕等が出来るだけの事をしなければならぬ。それが同じ学校の仲間への僕等の最大の援助ではなからうか。

今はただ両君の冥福を祈り、重傷を負つた新美君の早期全快を祈つてやまない。

繊維化学科より救済活動に参加した者

- 4回生 木下泰忠，広瀬節子，堀内勝宏
 3回生 分部行男，竹西壮一郎
 2回生 阪本義章，今西修三，倉内 浩，長沢統一，山道克啓
 西沢康雄

繊維化学科カンパ金額

1回生	25,5000
2回生	33,5000
3回生	22,5000
4回生	18,5000



温 室

4回生 村 田 紀 子

冬

ガラス戸は風をさえぎり
太陽は頭上にかゞやく
デンドロビユウムが カトレヤが
シンピビユウムが 誇らかに咲き
極楽鳥花が実を結ぶ

池は水を知らず

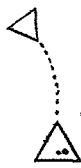
水連の花は青くかゞやき
パピルスは真つ直ぐに首を伸ばす
小さな世界

外は木枯し

木々は懸命に足を踏ん張り
山茶花は白い蕾を
しつかりとにぎりしめる

温室をぬけ出すときが近づいた。恵まれた環境にあまえすぎ、花をつけることを忘れ、葉ばかり繁らす。ガラス戸の外を気にもせず、小さな世界にまだ小さな世界を造ろうとする。こんな人間にはなりたくないと思ひながら、やはり、温室養ちのわがまゝが首をもたげる。冬には冬の厳しさを知り、夏には夏の暑さを感じた積りなのに、15の年に温室を出た人と、いつの間にか隔たりが出来、私はあまく、彼等はきびしいと云う。周囲をみまわし、わがまゝだ、環境にあまえすぎていると憤慨し、自分もその仲間であることに気づき、あわてる。

温室を離れるときが近づいた。新しい世界、それも少し温度の低い温室かもしれない。人それぞれ進む道は異なる。自分の道だけを見つめればいゝのだろうか。カトレヤのような高貴な花はにつかわしくない。少しひねくれていても、嵐の中でも夢のもてるようにになりたい。これも温室養ちのわがまゝだろうか。



荒木武義先生のことども

岩崎眉庵謹記

荒木武義先生はわれわれ繊維化学教室の生みの恩人であり、又わが繊維学部が生みの親で、その人となりに於て、又其研究者としての偉らさに於て私の最も尊敬する人の一人である。

先生は若冠二十幾才の若さで東京の蚕糸専門学校を最優秀の成績で卒業されると共に、農商務省技師兼京都蚕業講習所教授として、創立者として赴任せられ、その後七十幾才になつて京都繊維専門学校が昇給再出発するまでわが繊維学部在職せられ、其間幾千に余る優秀な子弟をほんとうに心から育成せられると共に学問的産業的に偉大なる業績を続々と完成せられた。其為に全国の絹業者のこぞつて先生の教えを乞う者、まことに文字通りに門市市なすの盛況であつたと言ひ。筆者が研究者としての先生の一面に接したのは先生が七十才をこえられた或る講演会に於てであるが、実に高邁、適切、独創的、烈々たるファイト、若い者が恥かしい程であつた。加うるに寛厚よく人を容た、達識古今を誤らずまれに見る人徳のある方で、衣笠同窓会の人々が慈父の如く仰いだのも無理からぬ事と思われ。

某高弟の直話によると先生の講義は面白すぎてノートが取れなくて困つたそうだ。そのくせ先生に教わつた事は不思議に頭に残つていて、一生役に立つたということである。先生の講義はいわゆる世の講義とちがつて、先生の勝れた独創と豊かな体験の連続であつたから自然にそうなつたらしい。

諸子も聞いたかも知れないが、本学部創立発足せんとする際、繊維化学科は全教室の意見によつてまさに暗から暗に葬り去られることになつた。この報告を聞いて一喝されたのが先生である。これからの時世に繊維化学科のない繊維学部を造つてどうする気か？人が無ければ探して来い、全がなければおれが集めてやる……と言つて先生のお力で巨額寄付金が集まり、文部者からは一銭の予算も仰がなくて繊維学部繊維化学科教室ができたのである。

数年前亡くなられたが、今しも何か事がある毎に先生御存命なりせば……と思ひ事がまことにしばしばである。

京の四季

四回生 喜多敏夫

学校生活も今終ろうとしている。想えば感慨一しおなものがある。学校生活の終は又京都での生活の終でもある。二十有余年、人生の半分を過した処を巣立ち、再び帰らぬ旅へ発とうとしているのである。詩人ならずとも感慨一おなのも当然ではないか。

京都に生れ、育ち、成人した土地なのである。その地には喜びと哀しみと、笑と涙、時には誇示、時には恥辱、これらが重なりあつて埋つているのである。人間の「習生」ではあるが、これ等を「想い出」というアルバムにして、旅立つ身なのである。小さな歴史を残すともいえる。去るに当つてその印象を、古都の四季と、洛中洛外の人々を書き記して小さな墓標にしたいと思う。

京洛の春は桜にはじまる。四月十日頃平安神宮、嵐山、円山、清水……と花だよりが聴かれる。桜とはうつろい易く、疵つき易いものなのである。酒席の相手をさせられている桜の何と哀れて、ものがなしい風情をしていることか！桜とは実際静かに眺がめ哀しむものなのである。桜を愛するに最もふさわしい場所はおそらく山科疏水の堤ではないかと思う。山科駅、又は四宮駅で電車を降り、疏水を下つて日岡附近までは、実に見ごとである。二回生の春、「美しい人」と喧嘩して、四宮から日岡まで歩いた時の印象は今も忘れられない。まだ冷い四月の風、傾きかけた太陽、霞がかつてはいるが、なんとなく寒むような街とその向うの山々を眺め、独り疏水べりを歩いた。桜の花卉が散つて疏水に流れ、うたかたのように時に結んで、又離れる。前にも後にも一人もみえない。水は碧く、流は速く、水音は軽やかであつた。冷い風に吹かれ、桜のかすかな、かすかな匂が運ばれてきて、心を濡らせる。時々思い出したように裏山で木を切る斧の音がする。それに誘われたように桜が散る。また元の静寂にもどる。花卉は碧い山を写した水に散つて流れ去つてしまう。何もなかつた。何も起りはしなかつた。永遠に時間はある。そして一瞬一瞬がすばやく流れ去つてしまう。真白な、ほんとに真白な花が、太陽に照らされて散る。歩いてみた。面影がついてきた。又歩いた。独りで花の中を歩いてみた。どこまで行つても、どこまで行つても花の中を、哀しみがどこまでもどこまでも続いてくる。桜はほんとに哀しい花なのだ。

同じような所は法然院のあたりの堤にもあるが、人里が近くて趣は一段と落ちるようである。

五月は加茂川の美しい頃である。水が春になつてしまつて、やわらかくなる。加茂大橋あたりからは、友禅染のひらめくのがみられる。春の喜びは友禅のはためきでもある。葵祭の行われるのもこの頃である。近づく夏を思わせながら京洛はのどやかになる。

六月には雨間をみつけて北山へ登る。二人で修学院から比叡山へ入る。一気に登つてしまおう。丁度疲れた頃、延暦寺の根本中堂にたどりつく。すぐそこにある夏の太陽が杉の大樹より、もれそいでいる。堂の湧清水が笑にうまい。境内は掃き清められているのだろうか、塵一つない。けれども人影はみえない。カランカランと堂の大きな鈴をふつてみる。鐘もポーんと打つてみる。音は全山に静かに、静かに響いて消えていつてしまう。根本中堂から横川中堂へと歩く。雨に湿つた土と、雫の落ちそうな杉の木立の中の細い道は、上つたり、下つたりしている。水滴に月の光がキラリと光る。男同志の気軽さ、冗談をいながら歩く。どんな話でもいいのだ。話していたら楽しい。どうせ二人は何の隔てもない親友じゃないか！突然真黒な杉木立から、真紅の堂がみえる。横川中堂だ。忘れられたように、ひつそりと立つている。堂を抜けて大原へ向う。途中琵琶湖が望める。『淡海の海』は、静かに遠くにかすんでみえる。それは二千年の昔からちつとも変つていない。大原からは寂光院と三千院がみられる。寂光院が観光化しすぎて佗居の趣がないのに、三千院は、まだ寂しく、厳しい感がするようである。

七月は祇園祭。月並みだが宵宮は華かたけど、佗寂しい気持になる。ゆかたがけの皆の顔は、知らない人ばかりだ。こんなに多勢いるのに一人の知つた顔もみえない。兄弟さえもが、他人にみえる。しよせん、孤独は群集の中に存在するものなのだ。そして人間とは孤独な生物であり、都会は孤独の集合体なのである。シャンシャンという鐘の音は軽やかさと哀しさを兼具えて鳴っている。祇園祭は孤独な幻想の祭である。

八月には、大文字へ登つて「大」の字の交点あたりで点火を待つ。点火と同時に、火は真夏の天に燃え上がる。地獄の業火、正にその通りである。しつらえた堂の中で僧が一心に経をと念えている。亡者は、安らかに成仏せよと懸命に経をと念える。映えた火は暑くてならぬ。暑さをこらえるには経をと念える以外にない。意味などはどうでもよいのだ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……；こうして京の夏は、送り火と共に去つてしまう。朝夕のひつそりとした秋の気配に、九月の来たのを知るようになる。

仲秋の名月は、南禅寺の境内からみる。石川五右衛門が住んでいたという国宝の山門の

まだ向うに月が出る。持つてきたウイスキーとチーズを噛りながら、二千里の外の故人を偲んだりする。乾盃の材料には事欠かない。昔白い月は、黒い松影の向うに出ている。薄い雲が速やく無常に流れていて、くら闇になつたり、晴れわたつたりする。その一つ一つに乾盃だ。晴れわたつた空に、松の影に、大きな山門に、そして明るいお月様に。南禅寺は俺達のものだ。天下に恐いものなどあるものか。乾盃！遠くへ行つてしまつた「あいつ」の為に！我等の青春の為に、美しかつた「あの人」の為に乾盃、乾盃！

広沢池の月や、円通寺の月もこれに劣らず美しいと聞くが、実際は知らない。

十月にも北山へ行つた。芹生の里、花脊峠もさることながら、魚谷あたりの薄の白さは、この世で最も華麗なものの一つに数えられてよいと思う。黄色や茶色の葉中に、まつ青の天に向つて薄が、そびえ立っている、コントラストのすばらしさ。しかし誰に見られようとも、又誇ろうともせずに山間にただあるのみではあるが……。

嵯峨野の美しいのもこの季節であつたが、今はその面影すらない。ただわずかに、落柿舎、釈迦堂あたりにあるのみである。京都の伝統の美しさが、観光バスによつて消されてしまつたのではないかと思う。

雨中に西芳寺の苔庭を見たのは去年の十一月、麓氏と一諸であつた。盛りを少しすぎた紅葉が、雨にたたかれて、暗紅色に光つていた。苔は緑の黒みがかつた色をしていた。茶室がうつるともなく池にうつっている。忘れられた舟の縁を雨がたたき。猪おどしの竹筒が、ポーンと音をたてる。雨のせいだろうか音の聞えるのがいつもより早い。相阿弥遣る枯山水の庭は、水の流れを苔に変えてこちらへ、走つてくるように思える。下の池の構図はいかなる日本画より、色感、構成に優れている。前面左に紅葉の大樹の紅と、その幹より池へ続く苔の色は面面によつて色調と光沢を変へる。遠景の池は暗い薄緑色をし、暗褐色の忘れ舟と好一対をなしている。左側には、少しまばらな竹藪がのぞいている。動ける日本画そのものである。

時雨れば詩仙堂もいいし、又円通寺の苔もやわらかくなるのはこの季節である。

大晦日は八坂神社に参る。信仰をもっている必要など全然ない。繩の先につけた火を消さぬようくるくる回しながら色んな事を誓う。半日もすれば破つてしまうようなのもよい。「酒はのみません」「麻雀はいたしません」「嘘はつきません」「勉強を一生懸命します」「e't c……、なんでもよい、今年いつばい守ればよい。そして今年もあと一時間しかないと思えば気が楽だ。おけら参りは誰が考えたのだろうか？ などと考えるのもよい。群集心理。無責任そのものだ。ゴーンと除夜の鐘がなる。清水かな、円山だろう

か、どちらでもよい、皆についてのし歩くだけさ。楽しい、無責任の楽しさだ。一月には京の街にも大低雪をみる。雪の降った後には東山、慈照寺銀閣を訪う。銀閣には昔銀箔が張つてあつたらしいが今はそんなものはない。しかしその後は白木が見ごとに出てくる。その上に年代の重みがある。いわば一幅の墨画の美しさがみられる。この世で一番華麗な色が白であるのを知つたのは銀閣においてであつた。銀閣の屋根の黒さの上に積つた雪の白さ。とても赤や黄の及ぶものではない。月見台の印象的な大きさは、紙筆に表しがたい。ただ、読者に行つてみられんことをお推めするのみである。金閣の雪も鏡池に写つてきれいであるが、今様金閣のもうもうした光は趣味にあわないものがある。円通寺、桂離宮もそれぞれよいが銀閣の比ではない。

二月は京の底冷を五体に感ずる時である。節分の際の吉田神社の豆まき、壬生狂言も、足から寒さが上つてくるのを感じながら観なければならぬ。実際寒い。しかし同時に湯豆腐のうまい季節ではある。親しい友達と、美しい女友達なら特に良いが、二人で湯豆腐をつつく。南禅寺あたりのひなびた場所で、淡白な京の味を感ずるのも、本当に素敵なことではないか。雪があつたりすれば、豆腐の温みが、じかに舌に感ぜられる。二人の友情の温みも通いあうものである。京の味が、京の人情でないはどうしていえなからうか。

三月は別離の時である。思い残すことも書き残すことも多い。会つていきたい人もいる。語りた言葉もある。だが全てをたち切る時である。残る人々と街々に伴せあれと祈る時である。

以上、印象に残っている京の四季を書き連ねた。しかしまだ残っている所も種々ある。天竜寺の庭、竜安寺、広隆寺の弥ロク菩薩像、宇治平等院、平安神宮、嵐山、高雄、醍醐三寶院等いくらでもある。それ以上に私の目に入らなかつたり、訪れたいと思ひながらはたせなかつた京の印象が多いにちがいない。京都はとうてい一生かかつてもまわれない所ではないのだろうか。浅学非才、拙文をも顧みず、京の印象記を書きつらねた。後輩の諸君も日本の宝庫を今一度、観賞されんことを推める。

拙文通読を感謝する。



1 回 生 コ ー ナ ー

一回生 鷗 野 高 資

○新春を迎えるやいなや、本学山岳部員遭難の報にせつし、我々一同驚愕の感を覚えた。明日は快報をと、ひたすら奇蹟を信じたが、当事者、スキー部、フンゲル部、OB等の決死的な救援活動にもかかわらず、1月12日捜索打ち切りの最悪の事態となった。我々一回生はここに哀惜の意を示し、救援活動の一端にもと、クラス会の決定通り、全員のカンパとクラス運営費兼積立金全額をもつて意を満たすこととなった。

……お母さん達の悲しみを思うとたえがたい心境なり。生還すれば山をよして心配かけません。……杉原君の手記一部より

二度とこういう悲しみが起らない様に、山を恋人とする友人達よ、気をつけようぜ。秤量室で北野君の時計皿がひたすら「主は何処ぞ」とものがなしく、ひつそりと底びえのする室にぼつんとあつたのは、何かしら寂しかった。(1月19日)

○分析実験の定量分析が「やれ色がついたの、消えただの「アンブルと間違えたのか、」塩酸を口の中まですすってしまった」とかぎやあぎやあいつてうさかつたのが、26日をもつて終講となつて、当日は後かたづけや器具の分配をやつた。内野先生、成田さん、杉本さんごろうさんでした。(1月26日)

○1月28日(曇天)

今日は分析化学Ⅱの授業の一環として、町研や林屋研で電位差滴定、伝導及滴定や高周波滴定などの機器を実際見学して、やつてもらつたりした。全く色をつけたり消したりしていたのが、全くばからしい気になつた。又恒温室で分光光度計を見せてもらった。(1月28日)

○例の繊維展のことであるが、時期で討議も二つに分れている状態、しかし我々一回生はなんの知識もなく「唯忙しいものだ」という仮定のもとギヤアギヤアいつているだけである。三回生の諸君、我々になんら知識を与えずして、強硬しようとするのは少しおか

しいよ。と、ここまで書いた所に三回生の準備委員氏より明日、一昨年繊維展の時のスライド、8ミリ映写を行うと連絡をもらった。一夜明けて本日1月19日、18号教室で岩研松本さん等の御世話で一回生を中心として、一幕幕のすき間から光が入り少し見にくかつたし、テレコだけの説明でなく、もつと実施面での苦勞話などもして欲しかつたが見せてもらった。勿論画面にうつる女性の顔ばかり見ていたというのもいたが、(申し訳ない)。しかしどうしてもこんなのをやろうという気持は我々すべて得た様である。さつそく実行委員を選出することにした。二、三回生方、やろうではないか。是非とも昨年の文化祭で工芸の名学科から受けた屈辱をはねとばそう。(1月19日)

○12月24日のドイツ語Iのテストは先号でもいつたが、又この29日物理学概論のテストが、4時10分より5時40分の間にやられた。後期テスト期間にあと一週間もないのにと、これは又、昨年の映画界残酷ムードが少しおくれて今この学園内にやってきた様だ。(1月29日)

○一番最後になりましたが、四回生諸兄姉の皆さん、御卒業おめでとう。我々一回生、心より御祝申し上げます。

繊維展等も開かなかつたし、C科内での対抗試合など出来なかつたので、一部の人のをぞいては、あなた方と全々おつきあいがなかつたのはこの上もなく残念なことでした。あなた方の御卒業で織化教室もさびしくなりますが、我々在学生一同、又入れかわつてこられる40数名の同胞と力を合わせ、あなた方が受けついでこられたC科の伝統を守つていくつもりです。どうか御自愛つとめられ過去四年間間あたためられてきた金の卵をかえしてください。先号でだれかが書いていた様に「無精卵」であつたなどとはいわないように、日本の化学工業界の担い手として御活躍なされることを一回生一同期待しています。

「池のコイもあなた方との別れを惜んでいるのか、この頃水面近くにやってきていますよ。」(1月30日)



無題

研修生 渡 辺 昇 三

単車でぶつとばしてみたいという、笑られるのである。

気がくしやくしやするときの薬であると僕は思う。

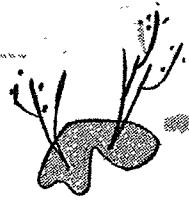
故郷にいる時は気がくしやくしやすると、単車でポリ公のいない道路をつつばしたものである。おかげでよく衝突をしたり、スピード違反でひつつかまつたりした。こちらに出てくる時おふくろは車を送ってくれというとおこられたのです。

これからは車の季節になり、また三面をマツハ族、カミナリ族がにぎわすとおもわれるがやはり若い時代にはスピードというものに撞かれるものです。単車に乗って飛ばしていると無我の境になりなにかも忘れてしまうのです。心がはれわたる気持。

現代の若い者は無軌道なといわれるがやはり人口増加ともなつてその様な人間が出る数も増えてその中に例外といつて馬鹿みたいなどんでもないことをやらかす者がいるからいわれるのである。

その若いエネルギーを発散させるために鼻に一つづつぐらひは広い土地を若い者に与えて、単車でなんぼでもできるだけスピードを出してとばさせる。衝突して死にたいやつは死なせる！まあこれは僕の小さな抵抗であり思うだけである。これが実現してみろ、死者続出、殺人可能、ということになる、と考えると単車にはスピードを上げることもできないように会社の方から製作して売らせよという結論がでる。そうすれば、マツハ族はいなくなる。けれどあの大きな音をだして走るカミナリ族は可能である。消音器をとりはずせば音はできるのである。これをなくそうと思えば単車をつくらなければよいとなる。そうすれば自転車がよくとなる。するとスピードがないしペダルをふむのは疲れる。となると又単車となる。すると又元にもどりマツハ族、カミナリ族となり、現代になる。これではきりがないので、今のままでポリ公に権力をもたせて、増員してみようできないようにしたらよいと思う。すると蔭で飛ばすあの快感はなくなるし、面白くなる。ああ、この世ははかなそとなげいて自殺と洒落こもうかとなる。いつまでもあると思うな金と「命」。

我 楽 多



町 研 生

(1) アル事

人ハヨク云イマス、縦ノツナガリト云ウ事ヲ。デハ一体ドノ様ニシタラ縦ノツナガリト云ウモノガ出来ルノデショウ。勿論ココデ云ウ縦ノツナガリハイワユル官僚的ナ縦ノツナガリデハナクテモツトヨイ意味ノツナガリデス。尤モアマリ面白クナイXX会、〇〇会ト云ツタモノヲ催シテ無理矢理ニ一応ツナガリデアル様ニ見エルモノヲ作ルト云ウ手段モアルデショウ。ダガ、モツトヨイ、ヨリ簡単デ且ツ面白ク楽シク更ニ非常ニ深イツナガリヲ作ル事ガ出来ル方法ガアリマス。ソレハ部ニ入ル事デス。ソレモ単ニ何デモヨイカラ楽ナモノニ入ツテイレバヨイト云ウノデハアリマセン。ドノ部ガヨイカ、ツナガリガ深イカラヨク考エタ上デ入部スル必要ガアリマス。アノ部ハ入部費ガ高イカラヤメダトガ、危険ダカラシンドイカラetc、ト云ウ理由デ最モ有益ナ部ヲ見捨テル事ハ愚ノ到リデハナイデショウカ。ゴク少量ノ出費ヲ拒ンデ大ナル利益ヲ得ル事ガ出来ナイト云ウ事ハ非常ニ馬鹿気タ事ダト思イマス。資本主義社会デハオ互ニ損ヲスル必要ハナイノデス。ダガ目ノ前ノチヨツトシタ出費ニヨリ、ソノ出費ヨリハルカニ大キナ利益ヲ得ルナラ当然ナガラソノ出費ハスルベキナノデス。ココデ注意シナケレバナラナイノハ「利益」ト「出費」ナル語ニ対スル、判断ノ方法デス。多クノ者ハ出費ニトラワレテ先ノ利益ヲ知ラナイ。

(2) イロ

人間にはそれぞれ個有のイロがある。そしてその人がもてるイロをいかに磨き、いかに生長させ、いかにきたえ、いかに解釈しそして、いかに身につけるかによつて、ある一人の人間たるものを示すものとなる。そして少しでもきたえ、つとめる事をおこなれば、このイロほどあせおとろえるものはない。そしてこのおとろえ程本人にとつて気のつかないものはない。そして更に自分では大いにつやのある美しい磨きのかかつたイロであると思つていても、人はそのおとろえをすぐ見ぬくものである。つまり人のおとろえはすぐわかるが自のおとろえには気のつかないものなのである。人間たるものゆめつとめる事をわすれるなかれ。

(3) 町研研歌抜粋公表

1. おお町研を歌わん

希望に満つる若さの泉

おお町研をたたえん

我らの愛する町研

はい

よき師、よき友つどい結べり

清き心、たぎる生命

町研の友よ、昔春かけて

自由の火をともしん

2. おお町研に学ばん

理想にもゆる学びの園

おお町研をたたえん

我らの愛する町研

はい

しろたえの衣笠の野に

澄みたる暈、不屈の闘志

町研の友よ、情熱かけて

永久の真理を守らん

3. おお町研はすてき

楽しき園、我らのつどい

おお町研はすてき

京都工織の誇り

はい

碁に強く、バトに強く

テニスに強く、野球に強い

おいしい事に 女性に弱く

呼びかけるよ乙女に

4. おお町研の研究

日本をリード、世界をリード

おお町研の研究

すばらしいものだ

はい

Syndiotactic, Isotactic

Atactic に Plastic

おいしい事に Romantic で

呼びかけるよ Dramatic

5. おお町研は秀才

理論にたけて、実験にすぐれ

おお町研は秀才

学生の誇り町研

はい

Academie で Original で

Technical で Fight man

おいしい事に時間がなくて

呼びかけるよ先生に

6. おお町研の先生

学に強く、生徒に弱い

おお町研の先生

よくそろつたものだ

はい

町田先生は隅におけず

内野先生は Wife に弱く

成田先生はドンファン

先生よ 万万才!

(4) へんな夢車

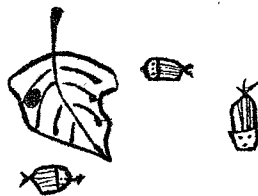
彼は卒業を目前にして、近頃どうもスツキリしない心境でした。「今頃になつて遊びすぎたのを悔んでなんになる！」などと彼よりもずつと遊びすぎたやつになぐさめられているのか、けなされているのか、どつちともとれるような言葉をかけられても、彼のそのスツキリしないという原因はそんなことではないようですので、どうにもならなかつたのです。小学校以来ずつと続いてきた学校生活、それももう終りだという、無粋な彼にはめずらしい、ロマンチズムも、その原因の一部にはあつたでしょうが、それもほんのささいなことではなかつたのです。かといって学生という特権——春眠、夏眠、秋眠、冬眠をむさぼり、割引率9割いくらという定期で「きせる」をしては国私鉄を泣かせ、学割なるしろもので小人と同類運賃で4人分の座席を占領し、etc, etc, —の行使権もこれで放棄しなければならぬからというあまりにも現実的な理由からでもありませんでした。

やつぱり彼のスツキリしない心境の原因は卒業したら就職するという、普通からみればごくありきたりで当然のことにあつたのです。彼はいまでも彼自身の置かれた立場、環境——日本資本主義に対してある種の不安といらだたしさをすてきれませんでした。そうかといって早急なある種の社会的変革によつて現代とはまるつきり反対の社会体制がしかれることを望んでもいませんでしたし、あるポリティッシュユパルタイのごとく、形式上だけの民主主義をとнаえて、実際の内容は独占資本家とつながる保守党となんらかわりないようなものには腹だたしさをおぼえていたのです。ですから会社に入つて一生けんめい働いたとしても彼の労働が生産物に与えた附加価値の多くは、いたずらに資本家のふところをこやし、彼にはほんの一部しか還元されない。などとはつきり自覚するほどではありませんし、そんなことを何にも考えずに自分の為だけに黙々と働くという気にもなれません。要するに、彼にはどういふ心がまえで就職し、これからやつていつたらよいのかせんぜんわからないのです。なるほど彼のスツキリしない気持はこんなことに原因があつたのなら分るような気もします。なにしろかつての中学や高校の卒業時には何にもそんなことを考る必要はありませんでした。ただ上級学校へ行つて何かいつちようやつたらかと、おおげさに言えば *fighting spirit* なるものが大いに湧いたものでした。しかしこんどはちがうのです。

彼は入社式のことを考えました。社長はきつとこんなことを新入社員を前にしてのたまうでしょう。「諸君入社オメデトウ。諸君は今日からこの伝統ある〇〇会社の社員となるわけでありませう。会社というものは一個の大きな機械であります。そして諸君はその機械

を構成する一つ一つの歯車です。歯車が一つ故障しても機械である会社は動くことができません。ですから会社の運命は諸君一人一人の肩にかかっているのです。どうか会社の為、ひいては日本の為の為に頑張ってください。」どうせどこの社長でもまあこんなことをもつともらしくしやべるでしょう。しかし腹の底ではどう思っているかわかりません。そして歯車とはなんといやなヒユでしょう。そしてなんと資本家に好都合な例えでしょう。しかしもともとへそまがりの彼のことです。まともにはうけとりません。彼はここで考えます。歯車だつていろいろある。固定軸にベアリングでつけられたどつちにでも回転するもの。歯車のずつと多いもの少いもの。回転を直角につたえるもの。社長はどういうのをさして言つたのでしょうか。きつと最初のやつにちがいないでしょう。ここまで考えたとき彼は一大決心をしたのです。「よし、俺はいつちよへんな歯車になつたろ。」と。(へんな外人というのがときどき耳に入りますがあのアクセントでのへんなというわけです。)ですからへんなといつてもへそまがりのいつも反対方向にはかりまわるといふしろものではありません。会社という大きな組織機構の中にあつて、たんに情性とマンネリにおしながされるような歯車ではなしに、右なら右、左なら左と回転方向明確な信念をもっている歯車とでもいいでしょうか。すなわち普通の歯車からみればへんな歯車にちがひありません。ここで彼はもう一度はつきり感じました。「へんな歯車になろ。」と。ここまできてやつと彼のどうもスツキリしない心も、少しはすつきりしてきたようです。まだ完全にスツキリしないのは卒論実験がいまだに完成していないせいかもしれません。しかし今となつてはそれも時間の問題でしかないようです。

スーダラ卒論生曰く、「アホやなあ、何もそんなことくよくよ考える必要あらへん。スイスイと働いて、ガツポリもうけて、バツチリ遊んだらええだけの話やないか。こんなくだらんもんここまで読んだやつは、ハイ、ゴク로우サン。」



我々人間は

1回生 秋田佳宏

我々人間は、自己の内部に生じてくる主体性発露を欲する止める事の出来ない力によって生活している。我々は、自己の主体性を確立し、主体的に生きる事に努力しなければならない。

この様な観点に立つて、我々の大学生活をながめてみたいと思う。

我々が真に主体的に生き、真に自由に生きようと欲する時、我々に可能な道はどこに開かれているのであろうか。

研究に？ スポーツに？ 芸術に？ No / 政治に /

我々の住んでいる社会・体制中で、我々が真に主体的に・自由に生きようとする態度を示す時に、我々がその中で最初に、絶対にやり抜かねばならない事は何であらうか。現在の我々が住んでいる社会・体制は言う迄もなく資本主義体制であり、それ以外の何物でもない。従つて我々は大学に生活していると言えども、資本主義体制の強い支配力の下に生活しているのである。資本主義社会で生活し、生活させられている我々は、根本に於て誰に奉仕し、誰の為に労働しているのであろうか。

我々は大学に生活し、研究生活にいそしんでいると言つても、我々に真の意味の研究の自由が与えられているだろうか。勿論、自由というのは勝手気儘な事を行なうとの意味ではない - 自由とは、必然性に沿つて、必然性を踏みしめて表われる物であり、この必然性を無視するのは、無秩序であり、圧迫である。

では、現在の社会体制、歴史的過程に於て、最も大きな必然性を持ち、最も大きな力で迫つて来ているのは何者であらうか。それは、人間解放の運動・人間性尊重の運動である。人間性の尊重 / ……この言葉の持つ響きが、現代程人の心に深く共鳴を呼び起している時代は過去の人類の歴史を見てもあまり類を見ないのでないだろうか。

我々の周囲には、自然の果しない猛威の前に、文字通り無抵抗に、寒さに震え、飢えに苦しんでいる人々があまりにも多く見られ、それに反して寒さの心配、飢えの苦しみをせず、ぬくぬくと生活しているほんの一握りの人間が存在している。この考えるも怖い矛盾。これは何に起因するのか。

何故に、彼等大多数の人々は労働に日夜努力しながらも、少数の富者の何千分の一、何万分の一の生活費しか得られないのであろうか。これはまさに資本主義体制が極度に発展した結果生み出された矛盾なのである。

資本主義社会の支配者・権力者は何を目指し、何を得ようとするのか。彼等は、大多数の労働者の労働の結晶である商品の効用を自己の物にし、自己の利益を守り、増加させる事にのみ血眼になり、人間としての生活、人間性の豊かな結実を労働者に許す事を望まない。広く社会一般に、社会の大部分を占めている労働者に、その研究成果が渡されるべき大学をさえ、自分達の利益のために、産労協同の美名の下、魔手を伸ばして来ているのが彼等資本家である。

とすれば、我々大学に生活し、研究にいそしむ者は、自己の研究に責任を持ち、その成果を労働者一般が受け取れる様に、社会全体が豊かになる様に、目を光らせていなくてはならないのである。この様な責任を持つた大学生は、自己が労働者階級に属さねばならない事を認識し、広く労働者一般の人間性を尊重する立場に立つて、社会を厳しく、広く、深く見つめなければならないのである。そこでは、暇がないのだ、関心がないのだとは言ってはられない。自己の主体性を正しく発現するためにも。

我々人間は、全ての人々が豊かに、真に自由に人間らしく生活できる様な社会、一部の者が他の大部分の者の犠牲を強いる事のない社会を建設するために努力しなければならない。

強い人間を助け、能力のない人間を救う社会を目指そう！

編集部紹介

4回生	木下泰忠	2回生	加原敬助
	沢野敏実	1回生	鶴野高資
3回生	有松利雄		小川信夫
	金井政洋		宮崎能久
	樋本勲		
	堀江広		

■ 若いエネルギー ■

前号“現在の疑問”を読んで

3回生 堀江 広

“何かにぶつかつていたい”“これをやらねば俺の人生は全く無味乾燥なものになつてしまふ”“これをやれるのは俺達若い者だけだ”etc. etc.

私達の人生には必ず一度はこのように考え悩むことがある。一種の反抗期であろうか。有り余る若いエネルギーをぶつつける何物かを毎日血眼で探し求め、目標を見つければ飢えた獣のように飛びついていく。それは二十才前ちょうど大学に入つて間もない頃だ。私も例にもれずこのような時期があつた。1回生の頃だ。目標は“日米安保条約”四条河原町でのジグザグデモ、御池通りでのフランスデモ、自民党京都本部前での“安保紛砕”

“岸を倒せ”のシユプレヒコール、円山公園での抗議集会、クラス討議等、全く我ながらよく動いたものだ。デモでくたくたに疲れても快い疲労感だけが心に残つた。又、安保についての知識を得ようといろいろの新聞を読み、朝日ジャーナルを毎週むさぼり読んだものだつた。私達が安保を紛砕しなければ日本の将来はどうなるかを真剣に考え、涙ぐましい義務感と責任感で小さな胸を一杯にしていたものだつた。それがどうだ、私達大学生に直接影響のある大管法には全く無関心。どこが悪いのかも解らない。自治会執行部の人達には悪いが、彼等のいう事はすべて馬耳東風。講義をさぼつてマージャンするひまがあつてもデモに参加するヒマはない。2年前の私はどこへ消えたのか？ No! 消え失せたのではない。ただ今の私の心の奥深く眠りいつの日か目覚め頭をもたげ今の無気力な私をどこかへ追いやる日が来る。きつと来る。私はそれを期待している。ただ無理やり目覚めさせるのではなく、自然に目覚めるのを待つている。無理に作り出すエネルギーが仕事を成功に導びくのではなく、自然に心の奥から湧き上つてくるエネルギーこそ仕事を成就させるものであると信じている。

今の1, 2回生の諸君の若さには感心するし、同時に彼等が3, 4回生になつたらどのように変わるだろうかと楽しみである。こういうと彼等を非難しているように聞えるが、そのように解釈してもらつと全く迷惑である。事実、私達も2回生の頃、上級生の無気力に全く腹が立ち、来年は絶対にあのようにならないぞと強く決心していたものだ。それが今

では、2回生からヨレヨレの3回生と非難されている。私達はそれに対し“実験が忙しいから”と答えるより仕方ない。ヒマなように見えてやってみるとヒマがないのが3回生の実験・講座廻りではらばらにグループに別れると全員揃う時間も少なくなる。それがもとで自分達の殻にとじこもってしまう。自分を守ってくれる殻にとじこもり、苦しいこと辛いことはできるだけ避けようとする。これが無気力という形で現われているのではないだろうか。それに3回生ともなれば将来の事を考える。就職の事、これが第一だ。大学は現代の資本主義社会にのみ役立つ人間を養成する所でないことは確かであるが、技術系の大学に入った限り、将来一人の技術屋にならざるをえない。私達は会社の事を考える。大管法よりその方が大切なのだ。学外実習で工場へ行くとますますこの考えは強まる。“産学共同の繊維展ならやりたくない”と強烈にぶつた1回生もいたが彼はナンセンスだと思う。大学とは学問のための学問をするところなのか？ 私達工学系の大学としては工場と技術提携して研究を進めるのが最上の方法だと思う（最上というのは言い過ぎだ。私達の手力で新しい技術なり研究法を見つけられればこれが最上だ。）。これにより私達の学問も単なる学問のための学問に陥らず、現在産業の動向を知ることができ、社会に出て役立つ技術屋になれるのではなからうか。もちろん人格が完成されていなければならないことはいままでもない。岩崎教授がいつも言われる“君達はable engineering gentlemanの卵だ” socialistの卵ではない。

大学生活をふりかえって

4回生 森山文雄

今から思えば小鳥のように希望に胸をふくらませてはるばる親の古巣を飛び立ち素晴らしい独立した生活に一步をしるしたのはつい近日のように思われる。あの純情可憐な美少年も立派な先輩諸氏や同僚の教育良ろしく現在ある自分として成長したのである。

ある種の不安と期待とを持つて、今では住む人も無きあのなつかしい旧寮へ入ったのであった。慣れてくるにつれて友達も出来て日々が楽しく、遊びに遊び授業に出るのも忘れて遊び試験の前には先輩や友達の手紙を借りて歩き夜を徹して勉強したものだ。マージャンを覚えたのもこの頃だった。夜は友達と恋愛論や政治論に東の空が明らむまで花を咲

かせたものだ。

次の年は何か刑務所を想像させるような新寮で世話になつたが、ここでは特別の思い出もない。この年の夏休みに人生経験のつもりで北海道へ計画も立てないで一人旅行した。いざ大阪を発つた車中での心細い思いは今でもはつきりと記憶している。北海道に着くと見知らぬ物事の好奇心で有頂点であつたが、一生忘れられぬ楽しい思い出となつた。翌三回生の夏休みにも一人で九州旅行したが、少し旅慣れゆつたりと楽しむ事が出来た。諸君達も一度実行してみても、大変楽しいものです。

三回生から寮生活にも卒業して下宿生活に入り、京都の家庭を見て廻つた。廻つたと云うのは三回移つた事を意味するものでここでも良い社会勉強が出来たと喜んでいる。

大学四年間も過ぎてしまえば短いものであれもやりたい、こんなこともしたいと思つていた事の何分の一も出来ないで卒業してしまいそうな気がする。厚かましくて気が引けるが、私の経検から下級生諸君に云わせてもらうならば、しつかりした趣味を持つて欲しい。これは学問と同様に非常に大切な事であると思う。人の出来る事は多少なら何でもと云うのも結構だが、これならと云う自信の持てる物を作ることも必要であろう。

四回生の皆様もそれぞれの進まれる道に励まれ、楽しく有意義な生活を送つて下さい。最後に皆様の御健康と御多幸を祈り筆を置かせて頂く。

「乱文で読みにくいと思うが悪しからず」

38.1.29 記

第5回 思想、随想、幻想

三回生 金田洋二

新・侏儒の言葉

芥川竜之介の題を借りて、少々書いてみた。この下手くそな文章から、必要以上の意味は取らない方がよい。もともとないのだから。

熱血漢

あふれる正義感の持主に告ぐ、君はただ単に単純な人間であるというにすぎないのだ。

合理主義者

合理主義者になるには、まず金がかかることを知らねばならない。

ラッセルを見よ。彼は何度、合理的な離婚をしたことか。

大人と子供の相違

大人というものは、他人が大人であるとか子供であるとかを問題にしないものである。

何でも「大人だ。子供だ。」と騒いだり、「大人、大人」とむきになつて反抗するのは子供の証拠である。

子供の純粋さ

子供が純粋であることを必要以上に尊重するのはやめるべきである。この無責任な尊重こそ多くの害悪を生み出しているのである。このことは学生にもあてはまるものと心得る。

ある受験地獄緩和策

学生の持つ多くの特権を奪うことである。やれ、学割、コンパ、酒、麻雀、登山……

文化人

文化人になるには何も難しいことはない。時折、わかりもしない音楽会や展覧会に出席しては、評論のひとくさりも述べれば十分である。要するに文化人とは暇人のことである。

軽蔑

人を軽蔑するのは個人の自由である。しかし、軽蔑していることを素ぶりにも見せることは許されないことを知つて軽蔑せよ。

ガリ勉

ガリ勉をのしる人は、自身がガリ勉すら出来ないことを自ら認めていることを知るべきだ。

黒幕

あらゆる組織に於て、頭の良い男は常に黒幕たらんとするものである。

信頼

人を信じるのは程々にするのがよい。「裏切られた」などとなげく前に。人間は全て他人であることも知らねばならない。

進歩的学者

進歩的な学者になるには外国語に堪能でなければならない。学会で誰が早く訳したか

が問題になるのだから。

又、

別の意味で進歩的になる為には、社会主義者になることである。学生が進歩的だとほめてくれるだろう。だが注意しないと、いつ反動にされるかはわからない。故滝川氏の例もあることだから。

本

よく人は何故本を買うのかなどと愚劣なことを聞くから、本棚に飾る為と答えねばこの人を納得させる方法がない。

テレビ・コマーシャル

コマーシャルは出来るだけ低劣なものがよい。低劣さと製品の売行きは比例するものであることが統計的にわかっている。文化人よ、低劣さに余り目の角をたてぬ方がよい。

皮肉屋

皮肉屋とは大抵、驚く程の常識的な人種である。ただその常識が、世間のそれにくらべ、天邪鬼なだけである。

又、

彼は痛烈な皮肉屋だった。彼は皮肉屋さえも皮肉つていた。

自治会の連中の誤り

自治会の人々の犯した最大の誤りは、三、四回生の中に吸血的勉強家がいると思つたことだ。

フェミニスト

フェミニストとは最も女性を利用するのがうまい連中のことである。彼らは、一見女性に親切そうで甘い汁を吸うのである。

勉強家

勉強を余りしない連中というものは、人間は誰でも本来勉強は嫌いなものだと考えては、自らを慰めているのである。こういった連中は、自分の怠惰を胡魔化す理由ばかり考えている。やれ、人生だ、哲学だと……………

みずぼらしい人

ボロをまとつた人に同情するのは、君の勝手である。しかしながら、君の方がずっと、同情に値するではないか。能力、財力、……何に於ても。

教師

教師に最も同情することは、人に勉強せよと言わねばならないことである。

又、

常に学生より堅くなければ馬鹿にされることである。

特異な存在

少数のグループに於て特異な存在は、一見大切にされているように見える。悲劇はここから始まるのである。その人は、大切にされていると思ひ込むし、皆は大いに迷惑がつているのである。

成功の甘き香

ちよつとした成功に気をよくして他人をあざけるのは良いことである。やがて、自分もあざけられるから同じである。同じあざけられるなら、今の中に大いに他人を罵倒するのが得策というものである。

親切な人々

世の中には親切な人々がいればいるものである。他人がデモに参加することまで、万事、決めてくれるのである。

超数学

世の中には学問では考えられない議論が多い。百人の圧倒的多数が三十人であるという事である。 $100 = 30$ は現実には可能である。

三段論法

三段論法の作った最大の功罪は、何でも三段論法から引き出した結果は正しいと考えることである。

気を病む男

最も何でも気にする男は、如何にも何事もなかつたような顔を作ろうとするものである。こういう男は、好きな女に何一つ言えないで、知らん顔をする小心ものである。

評論家

評論家とは要するに、……主義、……的などの言葉をうまく、意味もわからないのに、使う連中のことである。

クリスマス

クリスチャンでもないのにクリスマスを騒ぐのはケシカランと目の角たてて怒る人は、結局本人は何もわかつていないのである。彼は、正月になれば目度くもないのにオ

メデトウと言うではないか。我々までも、おちまほ口をして「オメデトウ」と言わねばならないのは、大いに迷惑である。誰かこれにケチを付けてくれないかと常に考えているのに。

オツチヨコチヨイ

ちよつとした自然現象の原因について知るともはや、自然の本質をつかみ得たなどと考えるのは、オツチヨコチヨイの典型である。これは社会、人生何に於てもである。だから侏儒だと言われるのである。

大 学 生

大学生というのは、怠けるのに色々理由をつけるのがうまいだけを、最大の得意とする連中である。これになる為に毎年、何人かが自殺し、病死するのは余り意味のないことかもしれない。

誇 り

自分の学校の誇りを持つことは余り意味がないことである。それらは大低劣等感の裏がえしにすぎないからである。だが、劣等感を持つことには、断固斗わねばならないだろう。それらは常に優越感に変じようと刃をといでいるからである。この事は、逆も可である。

学生の論理

共産主義の論理は極めて有難い。全ての悪の原泉が社会ないし政府にあるというのだから、学生にとってこんな都合な事はない。だから、色々理屈をこねては自分達の義務を放棄しようとするのである。だが頭の良い彼等は決して権利を主張しておくことを忘れない。

有能な人間

真の有能な人間にとっては、他人が有能に見えて仕方がないであろう。

きれいな水爆

科学者の中には本気できれいな水爆を主張する人があるという。不思議な事である、汚い方が大量に殺人が行なえるのに。

自 衛 隊

現在の自衛隊に士気がないと嘆くにはあたらない。いざ戦争となると彼らは、勇敢となり、いばるだろう。しかし、その時には勲章をもらうまでもなく体を横えねばならないだろう。

残 酷 ム ード

日本人の芸術家と称する連中は、残酷な物が芸術の中に入ってくると、残酷でありさ

えすれば、何でも芸術であるとするような論理学が好きである。残酷を抽象と置き換えても同じことである。

宇宙時代の論理

もしS・F誌に出てくるように、他の宇宙に人類より高等な生物がいて、地球にやつて来て、人間を家畜として使うようになったら、人間はどう考えるであろうか。然るに、人間は地球上で、その高等故に他の生物を支配しているではないか。自分の身が可愛いければ、他の動物を余りいじめない方がよいだろう。

ミフア一族

確かにミフア一族というのはインテリと呼ばれる連中の観念の所産である。彼等は成程、ミドの位置に位するかも知れぬが、やがて、一オクターブ上があることを知るのである。

愛される人間

彼はすぐボロを出しては皆を笑わせた。

又、

余り出来すぎた人間等、一般の人々にとって興味の対象であつても愛のそれとはなり得ない。だが、愛する人間は、常に完全を求めようとするのも又、人間の特性である。

隣りの花

“隣りの花は赤い”とは至当な名言であるに違いない。しかし、その中には、常に、弱者あるいは劣等者のひがみの臭いがせぬわけではない。

オールド・リベラリスト

現在の若者達にとって、かつて自由の為に闘つた人間など興味はないものである。どうせ、今や彼等は単なるノスタルジアに生きる男でしかないと学生は考えている。

ザルツブルグの小枝

恋は盲目とはよく言つたものである。かのクレオパトラの鼻は実際には曲つていたのかもしれない。

有能な人間

社会が有能な人材を欲するのは当然のことである。ただ、不幸にして、そういう人材は決して、そこらにころがつてはいない。しかし、それらしい者はいくらでもある。

民衆

民衆が大衆だと、国民を持上げる連中の真意というものが、如何に人を馬鹿にしていることか。彼等は心の中で謙虚に詫げれば、少々の迷惑は大衆は許してくれると信じているらしい。

アブノーマル

ノーマルとアブノーマルの違いは単に比率の問題にすぎない。

悲劇

世の悲劇のあるものは、自分の能力を過大評価しようとする所に始まる。

平和

平和にブルジョワ的なものとプロレタリア的なものがあると主張するのは術学者の訓話の字というものである。平和とは単に、戦争のない状態をいうのである。

硬い頭

年寄り達が頭が硬いのは当り前の事である。しかし、若者の頭の硬い奴は鼻持ちがならない。

だまされる男

およそ、「だまされた」と考えている人間程、もう一度だます事は容易である。彼の訴える通りに、うなずいてやりさえすればよいのである。

国際間の道義

世の尻の青い連中は、常に人道主義及び道德律と言うものが国際間に通じうると考えている。又、変にぶつた者は、人道主義などナンセンスだと言つてみたいのだ。

悪い奴程、よく眠る

およそ、ありとあらゆる組織に於て悪い奴は必ず存在するものである。彼は巧みに行動し、しかも、ある魅力を持つている。だから、要領の悪い連中は常に彼に反感を持つのである。しかも、やがて自分には良い事があるなどと因果応報を信じては、自らを慰めているのである。だが、大抵の結果は、悪い奴の勝利になつて終るのである。だから、大望をとげんと欲する人は、まずよく眠ることだ //

ある阿呆の読書

阿呆に本を読ませるとロクなことではない。本に書いてあることを、ただちに自分のもとからあつた思想と感違ひするからである。

又、

本に書いてあることを他人に強制しなければ気がすまない。迷惑なのは、友人達である。

つづく

12号誌上の旅行記の続きは、季節はずれだと判断して取りやめました。読んで下さつた方々に、お詫び致します。

「繊維化学教室の生いたちの記」(後)

岩崎研究室 松本喜代一

8. 本教室の前身

繊維化学教室のそもその始まりは、かの世界第二次大戦の始まる昭和16年にさかのぼる。風雲急を告げる頃、わが国の化繊業界の躍進は全く目覚ましいものであった。即ち、大正4年わが国で初のビスコース工場が誕生して以来、わずか20年ほどの間に、その優位を米国と競っていた。そして昭和14年には、その前年米国でナイロンが発表されたのに一層刺激されて、わが国初の合成繊維「合成一号」「カネビヤン」現在のビニロンの研究が完成した。更に翌15年には、わが国でもナイロン6の研究が完成するし、英国では、テリレンが発明されるといつたように、いよいよ化繊時代の様相を現わして来た。しかし、当時の京都繊維専門では、化繊なんて絹や木綿など天然繊維の代用品で、いわば戦時中の物資不足を補うものでしかないように考えられていたらしい。そして、伝統の絹についての化学的な研究をするための学科として繊維化学科が誕生したように聞いている。スタッフも、生物化学系の先生方ばかりだったという。従つて、今日のような繊維化学教室にしようと、方向転換されたのは、戦后であつて、その著しいのが、大学になつてからである。

一方、学生の方も、戦争にかり出されるのをのがれるために入学したような人達が多かつたと聞く。教官側も、学生側も、そんな調子だったから、まるで無気力で、伝統の養蚕関係(当時は、養蚕関係の科が6つ程あつた)の科のカゲにかくれて小さくなつていたということである。

このような先輩 繊維化学第1回卒業生は、太平洋戦争たけなわの昭和19年3月に30名が巣立つていた。昭和20年には20名、昭和21年になると、戦争に学徒出陣されたりして、卒業生はわずかに7名、22年になつて復員組などもあつて38名、そして23年には、実に48名の多くに達した。それから24年が34名、25年も同じく34名、26年の27名の卒業生を送り出して、専門学校の幕は閉じた。その間の繊維化学の卒業生は8回に亘つて、計238名である。

以上のような状態であつた中でも、伊藤武男先生（前信州大学々長）、岩田久敬先生（九州大学農学部教授）、浜村保次先生（前繊維学部長）、美和正忠先生（前奈良女子家政学部長）も多く先生方の忍耐と努力のあつたことを忘れてはならない。

9. 本教室の同窓会「織化会」

昭和29年1月2日、それまで各卒業クラス毎に開かれていた繊維化学科の同窓会を1本にしたところの織化会が誕生した。その頃までのクラス会は、どのクラスも大抵正月休みに開かれていて、それに出席される先生方は、2つも3つもかけ持ちを余儀なくされていたと聞く。もち論、繊維専門時代、いや大昔より、現在の繊維学部の前身には、衣笠同窓会というのがあつた。これは現在でもやはり存続するが、今だにその主脳は養蚕科出身であつて、どうしても養蚕偏重をまぬがれていない。卒業生の数からすれば、養蚕、製糸関係は実に5000人余で、紡績科が約300人、繊維化学科が約500人という分布で、しかも、弱小学科？はいずれも創立以来やつと20年になろうとする若輩の集りでは、到底スモウにならない。しかし、ここに同窓会の運営という面に一大問題があるのを老先輩達は御存知ないのか、あるのか？ やや先を急いだが、話を昭和29年にもどすと、当時の繊維化学の卒業生は約250名だつた。衣笠同窓会に出ても、養蚕科の敬老会といつた寮囲気にはとつてもなじめなかつたらしい。そこで、若い繊維化学の集いとして、親睦会的な目的だけで、織化会が誕生した。関係先生方は、賛助会員ということで、会長の選挙権はあつても、被選挙権のないという、一寸そこらの同窓会のような先生をたてまつような形態にはなっていないのも、一つの大きな特長である。あくまでも、卒業生のための卒業生の集いである。

このようにして誕生した織化会も、今年は10周年を迎えようとしている。その間に果たした業績は有形無形の多くのもがある。その例は一々あげては書面も足らなくなるので省略するが、とにかく、初代、二代と勤められた林屋先輩、三代の橋野先輩、四代の須本先輩、五代（現在）の高橋先輩と受けつがれた会長を中心に、若さを売りものにした同窓会は、いわば卒業生の絶好の社交場であつた。しかし、ここにも衣笠同窓会の二の舞を踏む憂いが年々に高まって来ている。その改善は、今後の運営委員はじめ全会員の双肩にかかっている。

ところで一方、衣笠同窓会も、織化会につづいて出来た紡績会（紡績科の同窓会）の誕生を見て、マンモス化した同窓会の再編成を迫られて来ているようである。やがては、各

科毎の同窓会の学部の総括が衣笠同窓会であり、工芸の松ヶ崎同窓会と手を組んで大学として一本化した同窓会にまで発展していくのであろうし、また、そうならなければ分裂してしまい、小さなセクト主義のカラの中に入り込んでしまいそうである同窓会の今後の発展を祈つてやまない。

10. 本教室の教授陣

ここで繊維化学の恩人、先生、一人一人にハイライトを当ててその履歴と業績の一端を探ってみよう。年令順に紹介することにしよう。

(1) 岩崎振一郎教授 明治34年3月10日生 工学博士 兵庫県出身

わが国におけるビスコース人絹の工業化の草分けが、帝人(株)の久村清太、秦逸三の両社長であるのに対し、その学問的な基礎づけは、京大の喜多源逸先生であると云われている。京大工業化学の基礎を築かれた偉大な化学者 喜多先生の門下で、桜田一郎先生、故中島正先生らと共に三羽ガラスの1人として活躍されたのが、岩崎先生である。桜田先生の二年先輩に当る。喜多門下の人々には、日本の化学工業界における重鎮として活躍されている偉材が非常に多い。提出されたビスコースに関する研究論文は百数十報にのぼる長編大作だったが、その輝かしい第1報は、岩崎、桜田、中島、富久の各氏が手伝わられたものである。

ところで、岩崎先生は喜多先生のもとで送られた十年余の助手生活の間に、ビスコースの組成について一つの疑問を持たれ、それがきっかけとなつて、ビスコースの発明者クロース、ピバン西氏の学説を訂正するという輝かしい業績を収められ、工学博士号をとられた。以来、今日まで、その学説が定説となつている。即ち、ビスコースはグルコース基1個にキサントゲン基1個の割合で結合した化合物であるというクロース、ピバン説に対し、岩崎説はグルコース基2個にキサントゲン基1個の割合で結合したものである。

近年「積分反応」という新しい理論を打ち立てられたが、過去40年余のビスコースの研究生活で、前者に優る意義ある研究として、ビスコースや繊維化工のみならず、全ての化学反応、重合反応への応用へと一步一步前進を進めておられる。積分反応はいわば化学反応におけるオートメーションの基礎として反応工学上、大いに意義深い研究である。現在までの論文は、未発表分を含めて約40報になろうとしている。その他、一々あげると切りのない程、今まで先生の手がけられた研究や進行中の研究が、次から次

へと泉のように湧き出してくる。いや全く、先生の頭脳から湧き出すアイデアは、絶えることのない泉のようで、全くすばらしい。

研究歴と同じように、経歴も多彩である。喜多先生のもとで、理化学研究所の助手を終えられ、昭和8年錦華人絹(株)(現、大和紡織)に入社され、戦時中は同会社の広島工場の化学部長兼研究所長、18年日本油脂(株)に移られ、油脂研究所長までなられたが、終戦で退社。大学昇格直前の繊維専門学校へ迎えられた。産業界におられただけに、大学と産業界との連がりのポイントをよく知っておられ、産業界における顔の広さは、本学随一といえよう。

学会においても、日本化学会、繊維学会、繊維製品消費科学会、油化学協会などの幹部役員として、大いに活躍され、また活躍されつつある。昨37年4月に、オランダアムステルダムで開かれた第9回国際繊維化学者、染色技術連盟会議に、日本代表として渡欧されたことは耳新しいことである。ともかくも、われわれとしては、国際級の教授に教えを受けているというだけでも、幸といわねばならず、ただ感謝するのみである。そうして、先生の念願、「世界一の繊維大学」達成のため、微力ながらも、大いにお手伝いしようと思うのも私一人ではないだろう。

(2) 貴志雪太郎教授 明治36年1月6日生 農学博士 熊本県出身

従来、蛋白質の中のアミノ酸の割合は それぞれの蛋白質が特有の値をもっていて変らないものだと考えられていた。ところが、貴志先生によれば、蛋白質の中のアミノ酸の構成量は栄養条件によつて変化するというのである。この従来の学説をくつがえす新理論によつて、先年毎日学術奨励金をもらわれた。この新事実は絹によつて発見されたものであつて、果して、人体や他の動植物の蛋白質にも当てはまるかどうか疑問である。しかし、少くとも各蛋白質について一定不変と信じられてきたアミノ酸の結合、配列状態、化学構造が絹では変るということを実証されたのだから、学問的には大きい問題である。

この研究の発端は30年近くも昔にさかのぼる。それは、大正14年、京都高蚕の蚕種科を卒業、九州大農学部を卒業されて、片倉製糸の初代研究所長であつた昭和9年頃である。当時、専ら桑を中心にした絹蛋白の改良に勤んでおられた。その頃、糖の不足した桑の葉に、糖を与えると、絹を構成するフィブロイン、セリシンの二大蛋白質の割合が変わりしかも、蚕の体内の主要アミノ酸であるグリシンが増え、絹の収量まで多くなるという新事実を発見された。これが、先生の学位論文である。しかし、研究熱心な先生は、グリシンの増加は、単に蛋白の組成割合だけでなく、それを構成するアミノ酸の割合をも変える

ことになるのではないかという新しい疑問を抱かれた。つまり、その疑問が、先に述べた研究成果のそもそものスタートであつた。

しかしやがて、わが国はのろわしい戦争に突入したので、研究も国策に沿つた方面に転換せざるをえなくなり、サナギからビタミンB₂をとることに成功された。また、技術院の要請で焼土方による食糧増産の研究もやられた。そのような空白時代を経て、生涯の研究に再び取り組まれたのは、東北大で試験管実験でアラニンというアミノ酸とグリオキザル酸とによつてグリシンが出来ることを発表された。そこで貴志先生も追試をされ、更に生体実験をして同じ結果を得られた。このことから、かつての自分の研究で、未解決であつた桑の葉に糖を加えるとなぜグリシンが増えたのかというナゾを初めて解かれたのである。

近年は、羊毛などの蛋白合成の研究へと着々と進めておられる。

(3) 町田誠之教授 大正2年11月17日生 理学博士 京都府出身

従来合成繊維は非常に染めにくいものであつて、色々な方法が研究されていた。町田先生もその解決法として、染料は在来のものを使い、繊維の化学的処理によつて染色性を改良しようと試みられた。理論は、疎水性である合成繊維に、親水性の他の原子団をつけて染色性を容易にするというのである。数年前よりビニロンを対象にこの研究を進められ、エチレンイミン誘導体が効果のあることを発見された。これを使うと、例えばビニロンと羊毛の混紡品も羊毛用の酸性染料だけで一諸に手軽に染まる。

町田先生は昭和14年の京大理学部出身で、工芸の寺田、増尾両先生とは同期生である。大学設立までは工専の荒木先生のもとにおられた。ところが、大学になつても繊維学部には基礎化学をやられた教授は皆無であつたので、工芸より転属されたのである。それだけに両学部の長短所を十二分に体験されていて、大学には貴重な存在である。

先輩に当る荒木先生の海中の多糖類の研究の影響で、町田先生は、地上の多糖類、トロアオイやノリウツギなどの粘質物、和紙などの研究が本職である。植物体はセルローズとヘミセルローズとリグニンとのほぼ同量から出来ているが、パルプ製造には、セルローズだけが必要であつて、残りは廃液として捨てられることが多い。パルプ廃液が、もつと利用されれば、パルプのコストダウンは必至である。町田先生は、この利用法を基礎としての複雑なヘミセルローズの化学構造を決定されて、学位をとられた。

近年は、 紛の各種誘導体、繊維処理剤、光増白剤、特殊染料などの合成をはじめ、種々の共重合やグラフト重合など仲々活発に研究されている。現在日本化学会の近畿支部

代表議員などとして学会方面にも活躍盛りである。

(4) 相宅省吾教授 大正5年5月29日生 工学博士 大阪府出身

昭和16年京大工学部の桜田研究室出身。卒業後、戦争期に入ったので、相宅先生も海軍技術将校として、主として火薬の研究をされた。終戦時には、海軍少佐であった。その後繊維専門で教壇に立たれていたが、大学昇格と共に、岩崎研究室の助教授として昭和32年までおられた。講座増設になつて独立された。

相宅先生のそもそもの本研究は、高文子の溶解熱に関する研究であつた。暑い夏の日も、寒い冬の夜も、独りこつこつと研究室の片隅で、研究に勤んでおられた坊主頭の相宅先生も、折りから押し寄せて来る合成繊維の嵐に巻き込まれ、遂には、ナイロン、ポリエチ、ポリプロそしてスパンデックスの熔融紡糸、アクリルの埋式紡糸へと躍進された。そして、夢の繊維ポリエチ、ポリプロの染色に関する新しい方法を発見されて、これが学位論文となつた。この研究は、要するにポリエチ、ポリプロを塩素化して、染色性を改善し、種々の在来の染料で染色するというのである。

最近、合成繊維の放射線照射に関する分野へとその鋒先を換じられつつあるようだ。

(5) 後藤四男助教授 明治45年1月23日生 工学博士 大阪府出身

昭和10年京都高蚕の蚕種科を卒業後、九州大農学部、片倉製糸などを経られ、戦争中は中東大陸の山野を駆けまわられた勇士の一人である。

復員後、母校へ帰られ、大学昇格当時は、貴志研究室の助教授として、当時まだ、わが国では研究の緒についたばかりの電子顕微鏡によつて、主として、絹フィブロインの原状形成について研究されていた。これが後藤先生の学位論文となつた。その後ゆえあつて、岩崎研究室の方へ転籍された。それからというもの、水を得た魚のように、次から次へとその研究分野を広められつつある。絹の不燃性加工、フロツキー加工、捲縮絹糸、絹のW&W加工、羊毛の改良など、主として天然蛋白質繊維の改質方面に活躍されている。また前述のように、わが国電子顕微鏡研究陣の草分けとして、貴重な存在である。

(6) 内野規人助教授 大正13年4月13日生 理学博士 熊本県出身

昭和21年京大理学部化学科を卒業。工繊大誕生と共に赴任され、昭和35年秋、「マンニツヒ反応に関する研究」で学位をとられ、また、昭和35年夏より約1年間米国シカゴ郊外のバーディユ大学に留学された。本業はやはり、町田先生の系列のトロロアオイやメリウツギなどの粘質物であると聞く。

(7) 武内民男助教授 昭和2年11月12日生 農学博士 熊本県出身

昭和27年九大農学部農芸化学科を卒業。28年に赴任され、昨年春「家蚕における絹蛋白質の生成量およびその構成アミノ酸の相違について」で学位をとられた。この論文は、貴志先生の研究の系列に入るものである。

以上で本教室の主要スタッフの紹介を終るが、書き終つてどうもまづいことに、その記事がかたよつてしまった。紹介不十分な点が多々あつて、どうも筆者としても不満足であるけれども、今後の機会にゆずることにして、今回はこの程度で、ご寛容いただきたい。最後に、これら諸先生方にこれまでの御尽力を感謝し、尚 今后一層の御努力をお願いしたい。

1.1. 本教室の学生気質

繊維化学教室の学生は、昔も今も変わらず、常に繊維学部のリーダーシップをもっている。学生自治会もしかり。学園祭や大部分のクラブ活動もしかりといえよう。それは実に、入学の難関を突破して来たという自信と自負とが根強く心の底にあつて、それが先輩から後輩へ、そして更にその後輩へと受けつがれて来た塊われではなからうか。他のある教室のように、古い伝統の上にアグラを組んでいては、自然とそんな気持も湧いてこないのではなからうか。それとも受験当時以来の劣等感？の塊われが、ややもすると無気力にしてしまつていのだろうか。その後、本教室の学生は、良きにつけ、悪きにつけ、学部のキャスティング・ボードを握つているようである。

次に、繊維化学教室の学生ほど、まとまりのよい科は、他の科にみられないようだ。それというのも、地理的にも、ある科のように研究室、実験室が学部内に点在しているのと違って、白亜の殿堂にほとんど集つているのだから、まとまりの上で大層有利である。従つて、クラス毎、特に卒論生となつてからのクラスや、1回生から4回生までのタテの連がりのよさは、一寸他では珍らしい。しかし、ややもすると、仲が良過ぎて、けんか？することのあるのも、世の常で、ここにもそんな時をしばしば見受けた。

例へば、学園祭の時など、筋の通らない指令？にはソツポを向いてしまい、幹事を困らせる。しかし、数多くのリーダーの中で、リーダーのキングが出来ると、後は順風満帆といった調子になる。最近のよい例が、第3回の繊維展の場合である。一部の間に持ち上つた繊維展開催のノロシは、たちまちS君を代表幹事に祭りあげてしまった。ところが、夏休みを終つて帰つて来たある研究室の一派は大むくれ。留守の間の取り決めなんて、受けられないと大荒れ。いとも簡単に先のスタッフは御破算と相成つてしまった。そして、順

序正しく筋を通して、改めて新しいスタッフが、A君を中心に作られた。それから開催までは実にスムーズ。小リーダーマンが各自の責任を十二分に果して、あのような成功を修めることが出来たのである。これは、リーダーマンの多い繊維化学教室のホホエマシキ悲喜劇的一幕である。

繊維化学科の学生ほど、教官と親密感をもっている所は少ないように聞く。気さくな教官の多い教室にいる学生は、それだけ何かにつけて得である。マンモス大学の学生のうらやむのも無理からぬことであろう。学生数の少い大学の特長を多めに利用すべきである。朝夕の挨拶一つにしても、すぐ親密感が湧いてくる。名札をつけていることも、有力な手助けとなる。創立当時に比べてややその感が薄れているようなのは、独り筆者の偏見だろうか。

12. 本教室の学生運動

繊維化学教室では毎年入学式の翌日の歓迎会で、文部省より国立大学宛の通達である学生運動の禁止のあることが、各教授の間から新入生に通達される。一瞬シユンとする者もいる。しかし、政治問題に無関心になれ、というのではない。よく誤解を招く。人間社会が自由を保つためには、一つの定まったルールが必要で、それに従つて且つ各個人の責任を伴つてこそ真の自由である。大学とは、学生にとっては勉学の間であり、教官にとつては研究の間であつて、どこから突いても政治活動の間ではない。もつとも、一部文科系などの教官や学生の間には、あたかも政治活動の研究実験が大学内で行われているかのようなケースを聞く。しかし、少くともわれわれの大学のような、特に繊維化学教室のような所で、何故に政治活動の研究実験が必要なのか。不必要である。それこそ、ハタ迷惑極まりない。これは丁度、文科系の学舎内で、悪臭プンプンと発生するような化学実験するのと、よく似ている。彼らはキット迷惑千万だと怒り出すに違いない。そりや、教養としては、政治も経済も何もかも必要だろうが、それは学生個人個人が大学の門外で、個人として活動するならしてもよからうが、平和と秩序を守る技術大学の学舎内では、余りにも他人を無視した行動であり、行き過ぎである。そのようなことを熱心に研究したい学生は、さつさとそれに適した大学へ転校して、一人でも多くの人と共に研究にたずさわの方が身のためであり大部分の良識ある学生への最善の努力であろう。繰り返して念を押しておく。政治に無関心になれとはいわない。むしろ、将来社会へ出て、世の中の幹部となる人達なのだから、一般人よりもずつと関心をもつべきである。しかし、学舎内で行き過ぎた行動

はしてもらいたくない。これは、今まで苦杯をなめて来た一先輩の言としてよく聞いておいてほしい。世の中なんて、甘いものではない。昔、政治活動が盛んであつた頃、学生の中に革新的某政党のメンバーも確かにいた。その数が僅かでも、もともと人数の少ない学校なのだから、全部の学生がそのような風に見られ、折りから就職難の時代だつたので、採用する方はそのような危険な所からはとらない。ということになつて、随分多くの善良な先輩達は苦杯をなめた。それもやつと5年以上もの永い年月を経てやつと、工織大学は純白な学生ばかりであるという評判をとり戻した。その間、学内の結束は、現在の若輩達には知るよしもがな、である。どうか、せつかくここまでして来た学園を、無暴な連中のために打ちこわさないでほしい。自治会でリーダー格となつて、活躍するのはよいが、一部の連中に引きずりまわされないように、呉々も各自が自覚して、責任ある行動をとつてほしい。

13. 本教室の学園祭

最近二三年の学園祭を見るに、純真な学生らしさを失つて来ているのは、どういうためだろうか。例えば、球技大会をとりあげても、わずか2クラス100人たらずのもの、団結がまるでなつていない。選手以外の者は応援するでもなく、姿を見せない。中には、これ幸いと旅行したり、登山したりする者の幾何に多いことか。学生のための、学園祭ではないか。好むと好まざるとにかかわらず、自分達の選出した委員によつて企画運営された催しならば、例え選手として出場しなくても、何らかの形で参加すべきである。そこに学生の純真さがある。

学生の催しものは、大いにバカ騒ぎをするべきである。しかし、ある秩序と責任と自覚は忘れないでほしい。古きよき時代の旧制高等学校の連中のバカ騒ぎは、愉快で、ほろえましいものであつた。学生時代の思い出として大いに騒いだ。灰色の学園生活のうち、そのような日が一日でも多くあれば、大いに潤いとなり、なお一層楽しい学生生活となるに違いない。事実、旧三高卒業生諸兄の話には、その時のなつかしさがいつも湧き出て来るようだ。外国では、カーニバルの日に、また日本では祭りの日に、バカ騒ぎをするのは、何故か。常日頃とまるで変つた一日があつてほしいと思う人間の望みを実現するからではなからうか。学園生活のうちにも、そんな日がほしいと思わない人は恐らくないだろう。例えば、運動会などで、日頃、教えをこう教師達とも仲よく一人の人間として一日をエンジョイ出来たら、どんなに楽しいだろうと思う。ありふれた人まねの運動会では、ソツポ

をむく者も多い。無理からぬことかも知れない。十年程前には、仮装行列に、教官も研修生も学生と一諸になつて出場し、大いに青春歌の一助となつた。もち論、繊維化学の連中であつた。そして、それまでの学園祭の沈滞した空気を一気にふつとばしたものだ。それ以来しばらくは、球技大会でも、運動会でも、また文化祭でも、どうも学部の学園祭といつても、織化教室が中心になつて、まるで繊維化学科のための催しのようなのだ。これでは、もち論、主旨に反するので、今后は学部いな大学全体が、学長はじめ、本部の事ムの人、農場の人みんなひっぱり出して、学生と共に、みんなが楽しい学園祭にしてほしいものである。

京都工織大の独特の学園祭を定期的に催すようにすれば、それはもう、ただ小つぽけな大学内だけの催しものではなく、世間一般の人々まで引きずり込んだ、より一層楽しい、そして何かにつけて有益な催し物になるのではないだろうか。そのためには、伝統のない新制大学には、かなりの努力を必要とするだろうが、その成果が実つた時のことを考えれば、大いに情熱を燃すべきことである。本学のような小さな大学で、世間一般のマンモス大学のマネをしたところで、大した成果も期待出来ないに決つている。それよりも、他で一寸マネの出来ない一種独特の催しものを学園祭として催したならば、初めは例え、それが貧弱なものであつても、やがて回を重ねるにつれて、立派なものになつて行くだろうし、また、そういう風にもつていかないようでは、折角の催しもやらぬがまし、と悪評を受けるだろう。そのよい例が、繊維展である。今まで、三回を数えた催しも、もうこゝらで明確なダイヤにのせるべき時に来たのではないだろうか。当時者ともなれば、大変な仕事であるから、現状では、毎年とは、とつても開けるようなものではない。せめて隔年ぐらいの規模のしろものであることは、経験者なら誰でもそう思うだろう。ところで、繊維展ともなれば、世の人々は繊維の大学という限り、そこへ行けば繊維のことなら、何でも分ると大いに期待するに決つている。それだけに主催者側は、張り合いがあるし、またうかうか出来ない。繊維の事なら何でも受け答え出来ねば、看板に偽りあり、何じやあんな学校は程度が低いなんてきびしい風評を受けないとも限らない。だから、主催者である学生諸兄弟としても、大いに、繊維の実際的な知識をも、繊維大学生の教養として身につけておいてほしいものであるし、それはまた当然のことでもある。府立医大の学生が、その学園祭に、独特の無料健康診断などをして好評な蔭には、常日頃からの努力のあることを忘れてはならない。工織大の繊維展も、常日頃から身につけた知識を大いに活用してこそ、学園祭本来の意義があるのではなからうか。

14. 本教室の現状

繊維化学の現状はどんなであるか。その一面は、学生諸兄が一番よく知っていることである。ここでくどくど述べるまでもない。ただ一言、創立以来より十数年間を見ていえることは、最近どうやら破竹の勢いの発展振りもやや衰えて来ているように思える、ということである。この科学発展の目覚しい時代に、現状維持乃至は、発展の機会が少いようでは、ただもう衰微としかいえないのである。少くとも一般の発展度と同程度にまで、そのピッチを上げるべきである。そのためには、スタッフの充実、設備の充実ももち論必要であるけれども、それよりも何よりも、学生一人一人の大いなる自覚が必要である。諸兄姉みな、大いにわれらの母校発展のため、わが国発展のため、われわれの道を手を粗んで行くのではないか。

今ぞ榮あれ 若きわれらに

いざいざ共に 青空のもと

腕 (かいな) 組みて 讀えてゆかん

古き都の みどりの母校

15. 本教室の未来図

では、繊維化学教室の未来図は、どうなるのだろうか。学生諸兄のみならず、卒業生まで誰しも皆が大いに気にする問題である。

創立当時と今と比べて、世界中の科学の発展ぶりは、実にすばらしい。なのに、本学の発展ぶりは、実質上微々たるものであるといつても過言ではなからう。繊維学部となると、全くお粗末である。繊維化学教室に、一つの講座の増えたのは、当然出来るべきして出来たというか、当初からあるべきだつたのが、遅れて出来たのに過ぎない。それらに比して、旧帝大系のすばらしい発展、地方新制大の躍進ぶりをみるにつけ、われらの大学のお粗末な進展ぶりは、全くもつて歯がゆい。誰しも疑心暗鬼になるのも無理からぬことではないだろうか。

ここに若干の案がある。それら一つ一つには一長一短もあり、今直ちにどれがよいとは云えないけれども、世の中の動きからみて、その採択は遅かれ早かれ、ここ数年の間に行われると見て差し支えなさそうである。そのようなことが行われずに終つた時には、工織大に悲劇が訪れると思つてもよいのではなからうか。

A案：—— 両学部の合併。ただし、教養学部としては分離せずに、本学の特長である教養科目の受講と並行して、専門の基礎学課をも受講するというジグザグラインはくずさない。東京工大に対抗した大学の誕生。

B案：—— 両学部校舎の接近。A案の改良型。校舎が接近しておれば、実質上、合併されたのとほとんど変わらないと思われる。ただし、両学部それぞれ明確に、工芸関係と繊維関係とに分け、現在のように、似たような学科が両方にあつたり、当然繊維学部に入るべき学科が工芸学部にあるというような不統一がないものであつてほしい。その結果、東京工大に対抗した京都工大および、世界随一の繊維大学への飛躍が見られそうである。

C案：—— 両学部別個に拡張して、やがては、分離独立するという案。結果は、B案がそれぞれ別個に出来るといえる。

その他の案もまた多々あるようだが、公平な立場からみて、まず以上の3案ぐらいではなかろうか。これが私の見た3つの夢である。

繊維化学教室の未来図も、おのずと大学の未来図の中に入っているのであるから、そのような小さな夢は、はつきり見えなかつた。果してその運命やいかに！？

書き終つてほつとした。だが書き洩れたこともまだまだ沢山あるはずである。この「繊維化学教室の生いたちの記」もまたいつの日にか、書き改められる時もあるだろう。その時には更に充実した物語が書かれることだろう。

ところで、前篇に比べて后篇は、私見が多くを占めて、まるで不統一になつてしまったことは、深くお詫びする。ただ后篇は、繊維化学教室の一先輩の意見として参考にしてもらえば、幸甚である。

長々とした駄文を読まれた方々に厚く御礼を申しあげ、筆を納める。

(参考文献) 京都工芸繊維大学要覧
衣笠同窓会々誌「衣笠学報」
繊維化会々誌
繊維化学科機関誌「愛宕」および「チェーン」
京都新聞「新大学物語」

(昭38.1.31. 完)

昭和37年度

卒業生のゆくえ

編集部

芦田 孝雄	京大大学院	竹 迫 雄 司	積水化学
天 瓦 健 治	日本レイヨン	田 中 逸 雄	大日本紡績
井 伊 国 裕	三菱樹脂	千 葉 明	京大大学院(工)
池 田 弘	三菱製紙	寺 田 英 一	日東紡績
井 上 修 次	呉羽紡績	登 川 寿 夫	倉敷紡績
井 上 正	東洋レーヨン	中 村 忠 夫	京大大学院(理)
井 上 道 明	東洋紡績	原	日本レイヨン
上 田 稔	大津タイヤ	平 野 昌 二	東洋クロス
上 田 裕 正	東洋リノリウム	平 岡 敏 雄	関西ペイント
内 正 正	日本ペイント	広 瀬 節 子	第一レース
大 野 徹	郡是製絲	藤 田 宏 哉	日本ゼオラ
大 洞 正 樹	阪大大学院(工)	堀 内 勝 宏	阪大大学院(工)
岡 崎 誠 之	東洋レーヨン	町 田 忠 太 郎	丸善石油
岡 田 卓 二	阪大大学院(工)	松 下 真 智 子	日立製作所
片 瀬 憲 一	呉羽化成	松 本 正	宇部興産
川 端 誠 治	京大大学院(工)	村 田 有	鐘ヶ淵紡績
喜 多 敏 夫	ブリヂストンタイヤ	村 田 紀 子	第一レース
木 下 泰 忠	大日本紡績	森 山 文 雄	倉敷レーヨン
坂 下 信 雄	帝人	大 塚 弘 毅	宇部興産
沢 野 敏 実	大阪市大大学院(工)	分 部 好 孝	大日精化工業
高 田 裕 行	京大大学院		

編集後記

今度は大変遅れてしまつて申し分ない。25日が31日まで延びてしまつた。

目下試験も始まつたが一・二回生以外はまあ楽であろう。

今回は特に四回生の原稿をと集めまわつた、おかげで編集委員が……と言われることになつた。

本当に速いもので光陰矢の如しとは四回生のみが感ずることではなからう。

あゝこんなこともあつたとたまに思い出して戴ければこんなうれしいことはない。最後に四回生の多幸と健康をお祈りして“Chain”の一年も幕を閉じる。

Chain No. 15

発行日	昭和38年2月16日
発行者	京都繊維大学繊維化学科
印刷	北斗プリント社
編集集	繊維化学科Chain編集部
編集代表	金井政洋